本多日生上人名著在庫品特價提供

一聖語錄 改版 特價送料共 金壹圓八拾錢
一日蓮主義本領 仝 金貳圓拾錢
一法華經要義 仝 金貳圓五拾錢
一日蓮主義心髓 仝 金壹圓五拾錢
一日蓮主義精要 仝 金貳圓九拾錢

磯部滿事謹輯
一本多日生上人 特價送料共 金壹圓七拾錢

申込所 東京市品川區南品川四一二
財團法人統一團
振替東京九四二〇番

一月刊「教」誌 定價一冊 金拾錢 送料 金五厘 一ヶ年前金 金壹圓貳拾錢

申込所 東京市品川區南品川妙國寺境內
「教」發行所
振替東京一〇九四〇番

統一定價

一部	金貳拾錢	送料五厘
半ヶ年	金壹圓貳拾錢	送料共
一ヶ年	金貳圓貳拾錢	前金之事

統一廣告料

表紙一頁	金貳拾圓	前金之事
一頁	金拾五圓	
半頁	金九圓	
四分一頁	金五圓	

昭和七年九月廿四日印刷納本
昭和七年十月一日發行（第四百五十一號）

神奈川縣橫濱市磯子區磯子町廣地一四八
編輯兼發行人 磯部滿事
印刷人 鈴木日雄
東京府荏原郡品川町南品川百八十一番地
印刷所 都印刷所
電話高輪六〇二四番

不許複製

東京府荏原郡品川町南品川四百十二番地
發行所 財團法人統一團
振替東京九四二〇番

編輯事務ハ發行所ニテ取扱フ

目次

理想文化の建設
聖訓摘要……日生上人
國難と立正大師……小林一郎
阿含の根柢を探りて（其四）……中村清一
落穗籠……上田辰卯
街頭布教に參加して……本郷常次郎
逝ける母を慕ひて……まんじ
記事
○本團月報 ○質疑應答 ○教報 ○寄附團費誌料領收

第三十七年十一月號

理想文化の建設

人心教化の事を輕んじ、區々末節に沒頭せる文化の病弊を革むべく、朝野擧つて大に教化醇厚の國策を建つるは極めて愉快なことであるが、併し猶ほ陶冶涵養の感なきにしもあらず。

所詮教化に就ては、當面の教化と、永遠の教化とを考へねばならぬ。當面の教化としては、我が萬邦無比の國體を忘れたるを反省せしめ、又奢侈遊惰に流るゝ時弊を自覺せしめ、國體の擁護と生活の合理化とに進ましむべきであらう。次に永遠の教化としては、我國文化の正統を明かにし、惟神道の精髄として我建國の精神たる天業恢弘天下光宅の國家理想を示し、御皇室の聖德を崇め、祖先の遺風を重じ、儒教の精髄として天道明德仁義忠孝の倫常を尊み、又宗教の精髄として佛教の深遠なる哲理と、微妙なる信仰と、調節せる菩薩行とを崇め、斯の如き三教協力の文化に根據し、堅實なる基礎の上に國民精神を陶冶すべきである。この永遠の教化を忘れて、單に當面の教化にのみ走らば、時を經て更に他面の弊害に陷り、決して健全なる文化を建設することは出來まいと思ふ。

凡そ人は宗教的の要求を固有するが故に、國體觀念と、生活合理化のみに於て充分なる滿足を得せしむることは不可能で、其處に信仰法悅の絕對的滿足を與ふべきである、人々が眞の平和安定を得てこそ始めて理想の文化が建設さるゝであらう、故に佛教を無視せる文化は謬なき色彩であると結論される。

聖訓摘要

道場神守護事

日生上人

この中に一箇所、簡單なことでありますが

常に人を護ると雖も、必らず心の固きに假りて神の守り則ち强し。（縮刷遺文一五三二）

といふ天台大師の言葉をお引きになつて居る、これは信仰上の心得として大事な點であらうと思ふのであります。神樣、佛樣は何時でもお護り下される譯であり、善い人だけを守つて惡い人を守らぬといふ譯ではない、佛法の思想からいへば、一切衆生を皆子の如くに愛し給ふ佛の思召は、惡い事をする者も尙更ら可愛いいとお考へになるのでありますけれども、『感應』と申して、佛の方からお護りにならうとしても、それを受入れるだけの力が無ければ、その感應利益を受けることが出來ない譯であります。それ故に神といひ佛といひ、お護り下さるには違ひないけれども、やはり自分自身が信心の心を持ち、又善良なる心を持つて、神の思召に適ひ、佛の思召に適ふやうにすることに於て益々その守りが强く現はれて來るといふことを仰せられて居るのであります。この思想は自他感應の精神で、宗教といふものは單に自力のものでもなく單に他力のものでもないのである、單に他力のものであつたならば、こつち

の考はどうでも宜い、向ふだけで事が足りるのでありますから、善人も惡人も皆佛の力、神の力を以て救つてしまへばそれで宜い譯である、泥鰌を掬ふやうな事を能く或る宗旨の人が言ふけれども、『逃げ廻つても逃げ廻つても、とう〳〵網で掬つてしまつた』といふやうに、宗教が泥鰌を掬ふやうな工合に、吾々が幾ら逃げ廻つても救つて呉れるといふことであるならばこの人生に斯ういふ教を弘める必要はない、吾々に見えざる偉大なる力のある神や佛が、或る方法に依つて逃げ廻る泥鰌を掬ふやうな工合に、一遍に救つて呉れさへすれば、別段人生に宗教を必要としないのである。それ故にさういふことは非常な間違つた思想である、又自分自身の力だけで事が足りるならば、宗教の神や佛の感應を仰ぐといふことが要らなくなるのである、或る意味の道德のやうに、自分自身の力で善を爲して行けば宜い譯であるけれども、それでは足らぬ所があつて、自分の力を盡した上に感應利益といふものを仰ぐ、そこに宗教といふものがあるのである。この絶對の力と自分の眞心との結びつくこの結合性の所が宗教といふものである、これは世界の宗教の定義である。それであるから之れを單に自力とか他力といふ言葉を以つて言ひ現はすことは間違つて居るのであつて、自他協力したる所の結合の感應といふ事が宗教の妙味である。で救ひの力は何時も強く〳〵現はれて居るけれども、自分の方で居眠りをしたりするから、そこで自分の方を眼を醒まして、さうして感應を強く受けるやうにしなければならぬといふのがこの聖訓にある所の意味合である、自分の信仰が強く現はれて來れば來るだけ、神の感應、佛の感應が強く現はれて來る。

日蓮聖人は他の場合に譬を擧げて、『弓の強くして弦の弱きか』といふ事を違べられて居る、弓は非常に強いけれども、それは張る所の弦が弱ければ斷れてしまふ、法華經は非常な立派な弓の如くであるが、之れを信ずる所の人々の信仰の弦が弛んで居つたり、或は弱い物であつたりしたならば、良い弓にはなれない譯である。完全な弓と強い所の弦と、それが相合して始めて矢が思ふやうに飛ぶが如くに、或は又之れを『鬼に金棒なるべし』とも言うて居られる。自分の力の本來有つて居るものを十分奮ひ起して、鬼の強きが如き者になつて、そこに宗教の他から來る所の金棒を握つて立つのが日蓮主義である、唯だ金棒ばかりえらいものになつて、自分が幽靈みたやうなヒョロ〳〵の者で、中風病みたやうになつてしまつた時には、金棒などがあつた所で持ち上げることも出來はしない、幾ら立派な金棒があつても役に立たなくなつてしまふ、宗教の或る弊害は其處に陷るものである。それ故にどうしてもその自力他力の協力點が大事である、自分の有つて居る力を思ふ存分に發揮發揚し、さうして宇宙にある所の偉大なる力の感應を受けて、其處に一種特別なる宗教的の力が現はれて來るものであるといふ事を示しになつて居るのであります。

本尊供養御書

玉泉に入りぬる木は瑠璃と成る、大海に入りぬる水は皆鹹し、須彌山に近づく鳥は金色となるなり。阿伽陀藥は毒を藥となす、法華經の不思議も又斯くの如し、凡夫を佛に成し給ふ。蒸は鵜となり、山の芋は鰻となる、世間の不思議以て是くの如し、何に況んや法華經の御力をや。犀の角を身に帶すれば大海に入るに水、身を去ること五尺、栴檀と申す香を身に塗れば、大火に入るに燒るること無し。法華經を持ちまゐらせぬれば八寒地獄の水にもぬれず、八熱地獄の大火にも燒けず。法華經の第七に云く、火も燒くこと能はず、水も漂すこと能はず等云々。（縮刷遺文錄一五二三）

これは唯今申した自他感應の上に、法華經の他力がどれ程強いかといふことを說明されて居るのである。玉泉といふ泉に木が流れ込めば、松の木が流れ込んでも杉の木が流れ込んでも、その美泉の不思議の力に依つてそれがみな瑠璃の珠に變るといふことを言ひ傳へて居る。或は又川の水が大海に流れ込めば、今まで淡水であつた物が皆均しく鹹水になるが如くに、世間に於ても左樣な不思議な事が澤山ある。それは海の力を以ての故に、利根川の水も信濃川の水も一度海に入れば淡水が皆一遍に鹹水になるといふ、他力の强大なることを說明して居るのである。いろ〳〵さういふ例を擧げて、世俗にも或は山の芋が鰻になるといふやうなことを言うて居る、これは皆傳說であるけれども、或る化學作用に依つて、例へば化石などといふ物を見ましても、直ぐに腐つてしまふべき物が皆石に成つて殘つて居る、草鞋であらうが木の葉であらうが、みな石に成つて千年萬年朽ちない所の物に變るのである、普通で行けば草鞋ナンといふ物は少しの時間を經過すれば腐つてしまふといふのであるけれども、或る一種の化學作用を以つてすれば千年萬年朽ちない化石に變るのである、それは實驗して見れば始めて『成る程』と判かる、『草鞋が腐らないナンてそんな馬鹿な事があるか』と言ふけれども、化石に成つて居れば決して腐りはしない。さういふ事は世間にも澤山あるがと言つて、左樣な殆んど不思議に近いやうな事柄を澤山お並べになつて、法華經を信ずるのも能くそれに似て居る、法華經の偉大なる力に依つて、その人が假に地獄に陷つたとしても、八寒地獄の水にも溺れず、又八熱地獄の火にも燒けないやうな廣大な功德が法華經に依つて得られるといふことをお示しになつて居る。法華經主義は、能く他の宗旨の人が『自力ぢや〳〵』といふやうなことを言うて居るけれども、それは全く誤解であつて、法華經は非常な强大な他力を示して居る。けれども宗教の意識といふものは今申す通りに、唯だ他力のみにして終つた時には何の役にも立たなくなつてしまふ、逃げて行く泥鰌見たやうになつてしまふから、そこで日蓮聖人は他力も强大であり、自力も强大であるものを結合せしめて、所謂鬼に金棒主義の日蓮主義といふものが起つて居るのであります。世間の言葉にしても『人事を盡して天命を待つ』といふ言葉がある、自分がノラクラして居つて、さうして『何もかも天命ぢや、果報は寢て待て、牡丹餅は棚から落ちる』といふので、毎日上を向いて口を開いて居つた所が、一年や二年經つても牡丹餅は棚から落ちて來はしない、それよりも小豆を煮た方が早いやうな譯である。『日本には天祐があるから……』といふので以つ

て、『軍艦などは造らぬでも宜からう、何も六割も七割も無い、一艘でも構はぬぢやないか、愈々となつたら一艘も無くても宜しい、唯だ神風だけ頼んで置けば大丈夫だ、敵の軍艦が小笠原より此方に來た時分には屹度吹いて貰ふといふことにして置けばそれで宜しい』といふやうな風に他力を餘りに頼み過ぎた時に於ては、それが一種の迷信になつて國家を誤り、又人生を誤ることになるのであります。それならばと言つて天祐をも信ぜず、威嚇をも信ぜず、唯だ自分自身の力だけを考へて居ると、そこには又缺けた點が出て來るから、どうしても日本人は國民の努力として爲すべき事は十二分に之れを踏み切つてやつて、その上に天の精神に副ふやうな品性を養つて、天の威嚇を受けなければならぬ。國民の努力も遺憾なきやうに、天祐に於てもこれが日本に降るやうにといふことで進んで行くのが當然の考へであるから、やはり自力と他力と共に強大なるものを理想としなければならぬものであります。

大井莊司入道御書

有情輪廻、生死六道と申して、我等が天竺に於て獅子と生れ、漢土日本に於て虎、狼、野干と生れ、天には鴟、鷲、地には鹿、蛇と生れしこと數をしらず、或は鷹の前の雉、猫の前の鼠と生れ、生きながら頭を啄き肉を咬まれしこと數をしらず。一劫が間の身の骨は須彌山よりも高く、大地よりも厚かるべし。惜しき身なれども云ふに甲斐なく、奪はれてこそ候けれ。然れば今度法華經の爲めに身を捨て命をも奪はれ奉れば、無量無數劫の間の思ひ出なるべしと思ひ切り給ふべし。

（縮刷遺文錄一五三五）

これは屢々日蓮聖人の聖訓に現はれる事で、大事の場合には屹度これが出て來るのであります。さうしてこれは日蓮聖人は人に敎へられるばかりでなく、自分自身の決心が茲にあつたと思ふ。元來宗敎の人生觀は、この思想が餘程大事な意味を有つと思ふのであります、我等が有情輪廻といつて、生れかはり死にかはりして行く間には、いろ〳〵の事に出會つて居るのである。此處には餘り善い事は並べてない、或は鷹の前の雉であるとか、猫の前の鼠であるとかいふやうな非常な怖い事ばかり出て居るけれども、他に詳しく述べられた所には善い事もある、或は楊妃のやうな美人に生れて一世の男子を惱殺した事もあらう、或は一代の富豪と生れて人生の快樂を恣にした事もあらう、或は國王と生れ權勢ある者となつて、人生の支配慾を恣にした事もあらう、けれどもそれも一時の夢であつた、人生五十年七十年の間だけを以つて考へたならば、善い事も惡い事も殆んど夢に等しいやうなことを以つて終つてしまふものである、宇宙の永い時間から考へたならば人生五十年ナンといふものは、實に一瞬の短いものであります、過ぎ去つて見れば實に短い人生であります。昔から偉い人ほどこの人生が短いといふことを嘗うて居る、馬鹿ほど人生が永いと思うて居る、本當の偉い人間になつたら、人生といふものは油斷をすれば實に光陰は矢の如しとか、白駒の隙を過ぐるが如しとか、一度去つて亦復らず、實に人生といふ

ものはハッと思ふ間に過ぎてしまふ一瞬の如きものぢやといふことを、宗教に入らん人でも言うて居る。それが墮落した人間ほど、人生といふものが何時までであるのか判らぬやうに思うて、酒でも飲んで酔ッぱらつて居る、さうして酒が醒めれば又飲み〳〵してグデン〳〵になつて、何時迄でもこの世の中に居られるやうに思うて居る、『親孝行をしなければならぬ』と言つても、『マアその内やるワイ』といふやうな譯で、三年經つても五年經つても『その内やる』といふことで過ぎてしまふ、非常に人生といふものが永いやうに考へて居る。修養を積まざる人々の頭腦には、人生の括りが些ともついて居らない、一年に例へれば十二月に入つても未だノラクラして居つて、愈々二十五日頃になつて『アヽこれは節季が來居るナ』と氣がついた時分には大晦日になつて借金取がやつて來る、『アヽそれは困つた』といふやうな譯である。それが賢い人ほど『一年の計は元日にあり』といふやうな工合に、正月三日休んで居る間に、本年の行くべき方向といふものをちやんと考へて置く。考への淺い人間といふ者はそんな事は考へない、三ケ日は飲んで暮すのだ、五日になつても未だ〳〵宿酔をして居るといふやうな工合で、その時〳〵に打つかつて唯だ誤摩化して行かうとする、人生一代といふものを通して考へることが殆んど無いのである。であるから佛教の無常觀といふことは、緣起の惡いことのやうであるけれども『人生は短いぞ、油斷をすれば直ぐ去つてしまふぞ、ハッと思つて後悔しても取返すことは出來ぬぞ』といふことを教へたのは、非常に善い事である。さう言はれたからと言つて、何も一時間も人生の時間

が減る譯ではないのである、この驚きを與へて貴重なる時間といふものを大切に使ふやうに導いたものである。

そうして能く考へて見ると、我等は何遍も生れかはつて出て來るけれども、何時も〳〵浮か〳〵して濟んで行つてしまふものである、どうか意義のある事に——即ちこの場合に於ては法華經の御爲めに命を捧げるやうな事があつたならば、それが爲めに廣大無邊の功德を成就して、今迄に無い結構な果報を得るのであるから、法華經の行者は愈々〳〵となつたならば命を惜まないで、眞實の法の爲めに身命を捨てるといふ決心を持たなければならない、それを『思ひ切り給ふべし』といふ言葉で始終仰しやるのである。兎角人間は、さうも考へたり又さうでないやうにも考へたりする、『法の爲めに盡すのは結構なことだ』と考へたかと思ふと、『モウ少し生きて居つて飲んで見たいナー』とも考へる、玆に思ひ切りが附かない、行つたり戻つたりする、そこを一度に『思ひ切り給ふべし』といふこの覺悟を、斷定を與へられて日蓮聖人は始終言はれるのである、これはお互ひが自分自身にも能く修養を積んで置かなければならぬ所である。軍人への勅諭にも『義は山嶽より重く死は鴻毛よりも輕しと覺悟せよ』といふお言葉がありますが、『マア戰爭が起つたら俺も覺悟する、マア〳〵戰爭の始るまではそんな覺悟は要るまい』といふやうなことではいかぬ、軍隊に入つたその日から、義は山嶽よりも重く死は鴻毛よりも輕し、一旦緩急のれば生命を捧げてもといふことを、ちやんと軍人勅諭を拜讀した時に心の中に打ち込ん

で置かなければならぬものである。法華行者もやはりその通りで、吝つたれな了簡を繰返して、出たり引込んだりしてはいかぬから、一度に『思ひ切り給ふべし』で、愈々といふ場合にはこの人生の生命を捧げて高潔なる一生の終りを告げなければならぬといふ事を、本當に決心して置かなければならぬ、それがどれ程安心であるか判らない。最近の例ですが或る立派な將軍があつた、この人は日蓮主義を信じても居られましたし、又幾度か戰場に出て生死の巷に出入した人でありましたが、私はその人の臨終の前から度々參つて居つた、或る時『どうか最後の信心を一つ聽かして貰ひたい、それは極つて居るやうだけれども、どうも少し薄紙がかゝつたやうな氣がする、硝子の障子から外を見るやうな風に、見える譯だけれども其處が息がかゝつて曇つたやうに、ハッキリ向ふが見えぬやうになつて居るから、度々教を聽いて居つて、この際に臨んで再び安心の事を聽くといふのは恥かしい次第であるけれども、どうか後習をモウ一遍して貰ひたい』といふことであつた、そこでいろ〳〵話をしましたが、その中に斯ういふ事がその將軍に取つては非常な領解を與へたやうであつた、『あなたは動員令が下つて、愈々是れから出發といふことになつたならば、戰場に出て生きて再び歸らぬかも知れない、寧ろ自分は勇しい戰ひをして戰場に斃れる決心であるといふことになれば、妻子とも訣別をしてその家を一度出るでせう、さうして愈々戰地に出發して行つた以上に於ては、家の事ばかり考へてマゴ〳〵して居るやうな了簡はあなたは無かつたでせう』『ウン、それはさうぢや』『それならばあなたの臨終といふものは、是れから

三日あるか一週間あるか判らぬけれども、達者な者でも何時か死といふものは來る、殊にあなたの病氣として早晩死は免かれないぢやないか、愈々となつてから訣別しやうとするからその間にマゴ〳〵するのである、最早や今日から妻も子供もみな喚んで、俺は愈々死ぬかも判らぬ、左樣なら……と言つてちやんと茲で挨拶をしてしまはれたならば、あなたの精神は片づいて心が安らかになるでせう』といふ事を話した、所が『それは至極善い、早速やらう』といふので、それから奥さんを呼び、子供衆を呼び、又遠方に嫁に行つて居られたお嬢さんなどがありましたけれども、皆電報で呼んで、さうしてちやんと訣別をし、小さい可愛いい子供衆がありまして、その子供の事は特に可愛いいと思うて居られて『此子が〳〵』と言つて居られたが、それにもスッカリ訣別をすると、精神が安定を得て非常に愉快な氣分になつたといふことで、最後にお嬢さんが遠方から來られた時分などは、病中で非常に衰弱して居つたけれども、歌か何か唄つて笑つて話をせられたといふやうなこともあつた位である。それは何を意味するかというと、同じ事でもシミツタレにまア〳〵といつて先へ延して、『愈々死ぬといふ時になつたら俺もやり損ひはしない、ちやんと覺悟はする』と言ひながら、その覺悟を延べ〳〵にして行く、さうしてモウ衰弱をしてしまつて、側から見ても迚も危ないと思ふのに『ナーニ大丈夫だ、まだ一週間や十日間は何ともない、事に依つたら快くなるかも知らんから、愈々快くならぬとすれば決心するけれども……』といふやうな事でマゴ〳〵して居る、その間に非常な苦悶をするのである。であるから壯健な時代

に、何時變化が起つても宜いやうに、人生は出る息入る息を待たざるものちやが、その場合が來ても少しもマゴツク事のないやうにといふことを決心して置かなければならぬ。能く軍人の遺書に、平生から『愈々の事があつて死んだら斯うして呉れ』といふやうな事が書いてあつて、突然何かの事でその人が死んだけれども、遺書がちやんとあつたといふことを聞くと、如何にも勇ましい軍人だといふことを諸君も考へるでせう、それと同じ事で、法華行者は平生日頃からやはり死の決心といふものはちやんとして置かなければならぬ。どれ程複雜な生活をして居つても、その複雜な生活に突然變化を生じてもマゴツク事の無いやうに、一切を整頓した頭を以つて暮して行くのが大事な點であらうと思ふのであります。

我は如來兩足の尊たり、世間に出づるは猶大雲の如く一切枯稿の衆生を充潤して、皆苦を離れて安穩の樂、世間の樂及び涅槃の樂を得せしむ。

—法華經藥草喩品—

國難と立正大師

文學士　小林一郎

私は明治四十二年の頃から本多上人には色々御教を受けて居りましたので晩年迄の總ての事を一通り存じて居りますが、上人の御一生に於てお互が最も長く記憶しなければならぬことは、日本の國に根本となるべき教を立てゝ此國の長く榮えて行くことに力を盡されたと云ふ點であると思ふのであります。失頃此方に於て御葬儀のありました時に色々の方がおいでになつて御生前の事を御褒め申したのでありましたが、私は其時に色々伺つて居つて何よりも此點を吾々は考へなければならぬ、國の將來を思はれる、どうしても日本の國は教を立てなければいかぬと云ふ點に着眼されて、終始一貫此事に力を盡されたと云ふことが上人の根本の御精神であるやうに思ひます、其他は此根本から流出た細かい事であります、一々算へ立てれば切のない程色々な點に力を盡されましたが、それは皆只今申上げた此根本の御考から分れ出た事業であるのであります。隨て上人の德を慕ふて居りまする私共は今後此點に最も力を盡さなければならぬことであらうと思ふ。

何と言ひましても教と云ふものが立ちませぬければ國は榮えて行かれるものではない、今の日本の有樣を其儘に觀ますと經濟の問題が一番根本になつて居る。段々世の中は所謂不景氣になつて居る。又外國との關係はどうなるか分りませぬけれども、恐ら

くは經濟的に日本は非常な壓迫を受けることでせう、滿洲の野に於て日本が歐羅巴若くは亞米利加の人と戰さをすると云ふやうなことは今日一寸考へられないのでありますが、併しながら假令劍を執つて戰さを致しませぬでも、今日の日本を壓迫しなければならぬと云ふことは何處の國も考へて居るのでありますから、其壓迫と云ふことは必ずや經濟方面に現はれて來るに違ひない。私は一昨年歐羅巴及び亞米利加を歩いて觀ましたが、何處の國でも全く行詰りであります、何しろあの五年に亘つての大戰爭の影響と云ふものは非常なものであつて、中々十年や二十年經つたのでは回復の出來るものではない。不景氣なんと言ひましても日本の不景氣などは物の數ではない、英吉利や獨逸邊りの苦んで居ることは逆も行つて見なければ想像も付かない。兎に角其中を堪へて居る。併し堪へて居るだけでは國は發展しないのであります。獨逸人などは隨分よく働くのでありますが、幾ら働いても足りない、さうして事業は段々衰へて行く。獨逸邊りは相當に方々の工場の煙は出て居りますが、それは殆ど全部亞米利加の資本で動いて居るので獨逸人自身としては何の得る所がない。さうして何處の國でも失業者を出して居ります、英吉利は今日では三百四十萬、獨逸では四百五六十萬の失業者があります、亞米利加などは一時は好景氣でありましたが、餘りに景氣が好いのに委せて生産過剰をした爲に—生産過剰と云つて品物は出來たけれども賣れないと云ふことで隨分苦つて居る、佛蘭西も殆ど五百萬以上の失業者を出して居る、之をどうして救ふか、どうしても救へない、色々方法を考へて居りますけれども、どの方法でも此不景氣の狀態を救ふことは出來ないと云ふことを何處の國の實業家でも政治家でも皆同じやうに言つて居る。それならばどうするか、私は色々な人の說を聽いて見たのでありますが誰の言ふ事も同じで

ある、新しく途を拓くのである、詰り歐羅巴人や亞米利加人が其國で働いて居つても仕樣がないから新しい途を拓いて働くのだ、新しく途を拓いて働くと云ふことは東洋方面で働くことである、之をしなければ自分自身が立行かぬ、であるからどんな方法を講じても東洋に發展して來る。東洋は人間の頭數は九億であつて、さうして日本は歐羅巴戰爭のやうな大きな戰爭をしないから物を買ふ力がある、さうして文化の程度は向ふに言はせれば低いから東洋を相手にして商賣をして大に發展して行つて、さうして東洋で得たものを以て自分の國を盛にし救つて行かふと云ふことは何處の國も考へて居る、此點に於て同盟だの協約だのと云ふものは何の役にも立たぬ、英吉利は日本の同盟國だと言つてもそれは損の行かない程度に於ての同盟國、自分が損をしてまで日本と同盟を保たふと云ふ考はない、會へば御世辭を言ふが、實際彼等が働いて居る有樣を觀れば日本を盛にして自分は損をしても宜いと云ふことは考へて居ない、今國際聯盟の樣子は動もすれば日本に不利で支那人の宣傳に乘つて眞實日本を抑へて居るやうに見えるが、さう云ふ觀方は淺はかな觀方である、何處に行つても東洋を知らぬ者はない、いや印度に二十年居つた、支那に三十年居つたと云ふ東洋の事を知り盡した人間は三人や五人は居る、それが支那人の嘘吐きを知らない筈はないのでありますが、それを知つて居つて支那人の宣傳に乘つて居るのは、實は騙されては居ないが騙された形をして支那人の肩を持つて日本を抑へやう、支那人の肩を持つて日本を抑へやうと云ふことは他日それと交換的に支那に於て自分達が利益を收めると云ふことである。是は見え透いて居る。併し外務當局としてはさう云ふ事を言ふことは出來ないでせうから一生懸命になつて辯解して居りますが、向ふの樣子を考へて見るとあんな辯明は役に立たぬ、皆知つて居る、知つて居る

のだから始末が悪い。何とかして彼等は東洋に伸びて來なければならぬ、伸びて來るには日本を抑へなければならぬと云ふのだから、日本がどんなに聲明してもどんなに宣傳しても役に立たぬ、滿洲問題の如きは餘り亂暴な事は出來ませぬから或る程度は控へるかも知れませぬが、滿洲問題が片付ければ今度は他の機會を狙つて何とか日本を抑へやうと云ふことには全力を注ぐものと考へなければならぬ。今後何百年も斯の如き狀態が續けば日本は先づ以て英吉利亞米利加、佛蘭西、獨逸、伊太利、或は和蘭も入りませう、此六つ位の國を相手にして非常なる競爭をする、此六つの國から壓迫を受ける、其壓迫に堪えて行かふと云ふ覺悟をしなければならぬ、斯う云ふ今時勢になつて居るのであります。でありますから當面の大事な問題は經濟問題に相違ないのであります。

偖て此經濟問題を無事に解決する爲にはお互國民の心の土台を入替なければならないことである、みんなが今のやうに眼前の事ばかり考へて、或は小さい問題などで爭つたり或は自分が餘り骨を折らないで旨い事をしたいと云ふやうな籠の緩むだ心持を何時迄も持つて居りますならば、事業などは決して起りはしない。日本人は決して頭の惡い國民ではありませぬ、英吉利人に較べても獨逸人に較べても負けはしない、併し頭は負けないが總てに於て負けて居る。何故か、努力が足りないからであり骨の折り方が足りないからである、日本人は器用な國民でありますからやれば出來るのである、私が外國から歸つて來た時に友達が集つて『お前は可なり長い間西洋を歩いて來たので西洋の御馳走には厭きて居るだらうから、日本の料理を御馳走してやらう』、其時にも私は言つたのですが、日本の料理は獨逸や英吉利の料理よりも旨い、料理の旨いことは佛蘭西は世界第一である、其次が日本でせう、さう云ふ風に向

ふ以上にやれるが、國の政治はどうだ、國の永久の事業はどうかと云ふとやれない、何故やれないか、心の土台が緩むで居るからである。自分の利益さへ得れば他の事は構はないと云ふ淺はかな考でやつて居るから不器用の西洋人に負けて居る、向ふは不器用だからこつ〳〵やつて居る、此方は器用だから少し位やつて濟ましてしまふ、先の事を考へないから頭の良い日本人が頭の惡い西洋人に負けて居ると云ふ有樣である、迚もこんな事では五つ六つの國を相手にして競爭の出來やう筈はありませぬ、昨日も他所に行つて斯う云ふ事を話したのでありますが、銀座通を歩いて御覽なさい、此儘では私は日本は亡國だと思ふ、あの廣い銀座の通、自動車も電車も通る日本で一番中心になつて居る大通に、彼方此方にカフエーがあつてまだ宵の七時八時頃からヂャズと云ふ音樂をやつて居る、中を覗いて見ると若い男と女がキャッ〳〵言つて騒いで居る、こんな馬鹿な事は世界何處にも無類である、それは外國だつて裸踊りをするやうな言ふに忍びない所もありますが、それは大通ではありませぬ、マア横町か裏通である、紐育の大通にカフエーはありますが、本當のカフエーでビール一杯飲んで十錢か十五錢拂つて來るのである、日本は銀座の大通でさう云ふ事をやつて居る、やつて居る人も怪しまないが世の中の人も怪しまない、そんな事をして居る奴が惡いのではない、日本國民全體が恥を知らないのである、みんなが緩むだ心持を持つてやつて居るから仕事をしたくも本當に出來ないし事業をしたくも本當に事業が出來ないのである。それで頭の良い日本人が比較的頭の鈍い西洋人に始終負けて居る、此事をお互はよく考へなければいかぬ。それだから先刻も言つたやうに今眼の前の問題は經濟の問題だが、此經濟の問題を本當に解決する爲には日本人の心の土台から入替へて行かなければならぬと思ふ、之を一つよく考へて戴きた

いものだ。商賣をするには利益を收めなければならぬに相違ないが、其利益を收めるにも正しからざる途を以て收めようとしても何にもなりませぬ。勿論損をしてまで賣りなさいと云ふことは言ひませぬけれども、正式に利益を收めるには基礎がなければならぬ。私は印度のカルカッタを歩いた時に向ふの商人に聞いたのです、『あなたは日本人と取引をし歐羅巴人とも取引をして居るが、何處に日本人の缺點があるか思ひ通りに話して呉れ』と言つたのであります。初めは御世辭を言つて居りました、『そんな御世辭は聞きたくない、本當の事を話して呉れ』、と言ふと、此人はメリヤスを商賣つて居る人ですが、日本の商賣人にメリヤス一打幾らかと言ふと一打五圓と言ふ、四圓五十錢で出來ないかと言ふと出來ますと返事をする、成程四圓五十錢で送つて寄來すが品物が惡くなつて居る。所が亞米利加の商賣人に四圓五十錢で出來ないかと言ふと、出來る代りに品物が惡いがと初めから言つて居る、そこが違ふ、斯う云ふ事を言つて居りました。私は日本人の急所を言はれたと思ひます。後に襤褸が出るのを承知で品物を惡くして居る、斯う云ふやうな違り方であります。是は唯一つの例でありますが、今眼の前だけを旨くやれば宜い、後に襤褸が出て斷られても構はぬ。總ての日本の商人がさうでないかも知れませぬが、さう云ふ事實が外國人から指摘される位に多い。我國の國民的道德が腐つて居るのである。是は唯商人の例でありますけれども、政治家にしろ學者にしろ其通り、學問をして居る人間なんと云ふ者はどうも頭の腐つた奴が多い、國の爲にならない事を平氣で發表して居る。さうして之を世の中で咎めれば研究の自由を妨げることは出來ない、俺の研究を俺が發表するのだから俺の自由だと云ふことを平氣で言つて居る、若し自分のものを自分で平氣で扱ふと云ふことになれば世の中はどうだ、私が刀を一本持つて

居るとする、是は俺の刀だから勝手に振廻して宜いと言つて大勢人の集つた所で振廻して宜いものかどうか、俺の刀を俺が振廻すのに誰が文句を言ふか、刀は此方で斬られるのは向ふだと云ふことが言へるか、そんなに振廻したければ人の居ない所に行つて振廻せば宜い、それと同じである。刀が自由に振廻してならぬものならば、金の力、自由の力、學問の力總て俺のものだから俺が勝手に振廻して宜いと云ふことはない、それをやりたければ人の居ない所でやるが宜い。學者が自分の學說を發表したいと思つたならば人の居ない野原へでも行つて喋るが宜い、大勢の人の中で振廻したならば多くの人が傷付くのだ、もつと大きく言へば國が壞はれる。それを又世の中の人が崇拜して其後からゾロ〳〵つ付いて行くと云ふのは國を寄つて集つて壞して居るものである、斯う云ふ次第である。之を何とかしなかつたならば外國との競爭にだつて堪へられる筈がない、自分で自分の國を壞して居るのだから他所の國からの壓迫に堪へられるものではない。日蓮聖人は『藏の財よりも身の寶勝れたり、身の寶より心の寶第一なり』と仰しやつて居る、藏の財である金や銀や其他の財寶も大事だが身の寶はもつと大事だ、身の寶と云ふのは身體に附いて居る技藝、才能、經驗、學問と云ふやうなものである。是は泥棒も奪つて行く譯にもいかなければ火に燒けるものでも水に流されるものでもない。それだから藏の財よりも身の寶が大事だ。所が身の寶は使ひ方に依つては惡くなる、學問があるから世の中を亂し金があるから風俗を紊す、そこで身の寶よりも心の寶大事なり。心の寶と云ふのは正しき信念の上にしつかり立て行く、だから心の寶の上に信仰が立つて行けば藏の財よりも身の寶よりもよく使へると云ふのである。心の寶を正しくすること に依つて身の寶も藏の財も生きて來る、此教である。今日の日本國に於て最も大事な教

であると思ひます。別の言葉で申しますれば即ち立正安國、正しい教を立てゝ國を安すると云ふ心持、此心持が十分に國民各自に徹底して居りますれば、懶けようたつて懶けられず遊んで居ようと思つても遊んで居られない。それが長い間好い加減になつて居つた、日本は明治の初めには西洋の學問技藝を學んだ、それを心に學べば宜かつたが上つ面だけ學んで根本を忘れて居つた。亞米利加人と云ふ奴は金さへ儲ければ何でも宜いと思つて居ります、尤も今の亞米利加人は日本人よりももつと精神的である、中心になつて働いて居る奴は中々偉いものです。此間亡くなりましたエヂソン、此人は御承知の通り三百何十と云ふ發明權を持つて居ります、實に偉い人であります。さう云ふ風に四百近くも特許權を持つて居りますから金は使切れない程入つて來る、名聲は世界中に響いて居る、それにも拘らずエヂソンは死ぬ少し前まで一日十六時間も研究室に入つて勉强して居る、或人がエヂソンに向つて『あなたは大分の御歳である、金は使切れない程ある、世界の發明王と言はれて「あなたの名前を知らぬ者は世界中に無い、ちつと遊んで樂にしたら宜いではないか』と言ふと、エヂソンは『私には考がある』『どう云ふ御考ですか』と聞くと『私は斯う思ふ、私は何時まで生きられるか知れないが、死ぬ時になつて私の生れた時よりも世の中が便利になつて居る、それに付て幾分でも私がお役に立つて居ると云ふことを見て死んだら初めて滿足して死ねるだらう、世の中を便利にするために役に立つて見たいと思つて居る他に考へることは何にもない、それだから生きて居る間に懶けることは出來ないと答へたさうであります。西洋ですからキリスト教でありますが、此人は神樣を信じ道を信じて居る、だから偉い、他の人も此點に感服してエヂソンを援けて居ります、御承知の自動車王のフォードはエヂソンを扶けて事業を完

成さしたのである。或年エヂソンの誕生日にフォードが御祝をしようと言つた、サア亞米利加で一番の金持であるフォードがエヂソンの爲に御祝をしてやると云ふ噂が立つたから大騷ぎ、大園遊會か大饗應會か是非行きたい、それにしても俺の所に案内狀が來るかと待設けて居るがまだ來ない、いや俺の所にも來ない、忘れる筈はないと云ふ譯で寄ると觸ると大騷ぎ、併し何處にも案内狀が來ない、當日になるとフォードが朝の八時に自分の家の自動車を自分で運轉してエヂソンの家の玄關に乘付けた、さうして『エヂソンさん、あなたの御誕生日で私は御祝したいと思ひますから此事に乘つて下さい』エヂソンが「有難い」と言つて乘りますと紐育の街をお晝頃まで引張り廻してお茶一杯飲ませないで左樣なら、それが御祝だ、何故かと言ふと「エヂソンさん、あなたの發明した電氣燈が此處について居りますよ、此處にはあなたの發明した蓄音機を使つて居りますよ、此處ではあなたの發明した起重機で荷物を揚げて居ますよ」と云ふ風にエヂソンの發明した機械をすつかり見せたので、左樣なら、お茶も一つ上げない。エヂソンは涙を流して喜んだ、こんな嬉しい誕生日をしたことはない、俺の今迄の骨折が世の中に役立つて居るのを知ることが出來たのもフォードの御蔭だと言つて喜んだと云ふ事がある、決して黄金萬能ではない、中には惡い奴も居るが、金さへ儲かれば何でもやるやうに思はれて居る亞米利加にもさう云ふ偉い人間が居る。然るに大和魂の本場と言はれる日本に賄賂を使つて勳章を貰ふ奴もある、そんな事では日本が亡びるのは當り前である。それだから元に返さなければならぬ、口先ばかりで大和魂では駄目だ、日本は世界に冠絶して居ると言つてもいかぬ。幾ら日本が尊い國でも教がなければ人間が惡くなる、天子樣の御恩を辨へない者は一人もない筈でありますが、日蓮聖人の御誕生の前の年に北條

義時が三人の天子様を島に御流ししたが國民は默つて見て居る、それには色々當時の行掛りはありますけれども、兎に角天子様に刄向ふと云ふことは日本の國體では出來ない筈である。其時に鎌倉では頼朝の妻の政子――是は後家さんでありますが、大勢の士を集めて演說した、「今度京都と戰さをしなければならなくなつたがお前達はどうする、京都に附きたい人は附くが宜い、鎌倉の味方になりたいと思ふならば留まつて附いて呉れ、それはあなた方の自由だ、併しあなた方は頼朝公の御恩は忘れはすまい、頼朝公があつて國を統一して天下を泰平にしたから今日繁昌して居るのだ、よもや朝頼公の御恩を忘れはすまい、頼朝公の開いた鎌倉幕府であるからお前達は鎌倉幕府を助けて呉れるだらう」と言つた時に、御尤に候と涙を流して多くの武士達が鎌倉方の味方となつた、そこで是等の兵隊を引連れて京都に征上つて天子様の軍を破つて三人の天皇様を島に御流ししたのであります。日本の武士も當になりませぬ、二十年三十年の恩は知つて居つても、日本の國創つて以來の三千年間の皇室の御恩を知らない、それが日本の國土の上に行はれて居るそれだから日蓮聖人がやかましく言つて居る。教が緩むだからだ、「王法既に盡きぬ」、今日だつてもさうぢやありませぬか、日本の國に生れて日本の國體を平氣で破るやうな事をして居る。さうして俺の研究の自由だ、思想の自由だと言つて居る、教がなければ國が亡びると云ふことは歴史上の事實がよく教へて居る。さう云ふ間違つた時代に日蓮聖人は御出になつて、正しき教を立てゝ此國を護らうと云ふので此大事業の爲に六十一歳までも命に代へて奮鬪されたのである。今や日本は昔の時代と違つて居る、日蓮聖人當時の蒙古一國を相手として鬪つたのとは違ふ、獨逸、佛蘭西、伊太利、亞米利加、英吉利等を相手にして血の出るやうな競爭をしなければならぬ、昔は劍を執り鐵砲を持つての戰爭だが今は人間の智慧の戰爭である。是は三年五年では中々片が付かない、此戰爭に乘出す日本人の覺悟も昔と違はなければならぬ。昔は唯一人の日蓮聖人の立正安國論で宜かつたが、今日は日本全體が立正安國論の精神で當らなければならぬ秋になつて居る。皇室に於かせられては畏も此時代を思召されて極めて御質素な生活を遊ばされる。天皇陛下には身を以て國民を率ゐさせ給ふ。洩承る所に依れば政務御多端の時に拘はらず少しの御暇でも學問の研究に使つて居らつしやると云ふことである、御生活の質素なことは申上げるまでもない。御用邸が大正十二年の地震で崩れたことは皆さん御承知の通りでありますが誰も手入を遊ばされたと云ふことを知らない、葉山の御用邸は二倍にする計畫だつたが御取止めになつた、皇后陛下が折々は繼の當つた靴下を御召になると涙を流して話をされた人もある。斯の如く勤儉努力質素の有難い御生活を遊ばされて國民を率ゐて居て下さるのに、懶けたいと云ふ國民がまだあつて銀座の大通の眞中で外國人に見られて恥しいやうな生活をして居る。之を見て誰も止めないで居ると云ふことは北條の昔とちつとも選ぶ所がない。是に於て吾々は日蓮聖人の御精神を吾々の心と致しまして、自分の心を建直すと共に他の人の心をも建直して此緩ぎ掛つた國の箍をしつかり固めようと云ふことに是から全力を注いで行かなければならぬと思ひます。是が吾々の責である、吾々は何の爲に生きて居るか、日本の國を建直すのだ、日本の國を建直して土台をしつかりすれば東洋の平和は保てる。東洋の平和を保つことが出來れば西洋人と對抗することが出來る。そこで初めて西洋人の眼が覺める、成程日本人は偉い、どうして建直つて來たか、危險思想で駄目になつた日本人がどうして建直つて來たらうと不審に思つた時に教へてやる。それは正しき信仰の力であ

る、俺の國は潰れ掛けたが正しき信仰を持つて居つた御蔭で此通りだと言つたならば、それでは俺達もと云ふ譯で日蓮聖人が日本に弘められた教が世界萬國に弘まつて行く、先づ以て日本の國を以てして世界に及ぶ。此大理想を持たなければならぬと云ふことは私共が新しく言つたのではなく本多日生上人が御生前に力を盡されたのである。私は本多日生上人を御生前先生と申上げて居る、自分の教を受けて居つた先生の遺された御精神は其處にあると思ひます。今後はお互に力を協せて此正しい教を立てまして、さうして國を救ひ世界に冠絶したる此日本の國を護つて行かふ、此點及ばずながら全力を盡して行かふと思ふのであります。（拍手）

＊　＊　＊　＊

漫賦　櫻溪

個心大法界　天地活文書
朝憶靈山室　夕眠本化盧
三藏眼孔裡　偶頌感興餘
我有家傳筆　一揮題大虛
我無千里翼　詩貫古今飛
長嘯瞻三界　短吟度萬機
風起戰楊柳　雨催誘白雲
心頭我坐斷　花影碎芬々
欲叩玄々得一詩　天門逆闢玉龍垂
風雷迎意鬼神躍　太白東坡以上詩

追憶故交人豪悵然述懷

故交多玉碎　老衲慚瓦全
恰似孤松搖　況臨亂雨天

阿含の根柢を探りて（其四）

中村清一

阿含の佛乘の發見について

阿含の佛乘の價値については右の說明で十分であらう。そうしてそれが必然的に法華經の佛乘と結びつき兩者が能開所開の關係に於て相倚つて一切經の心髓たる唯一佛乘といふものを敎へてゐることも、以上の所論によつて明かになつたことゝ思ふ。そこで然らばかくの如き重要なる意味を有する阿含の佛乘はどうして發見せられるかといふ點について、述べておきたい。

阿含經を唯だ何心なくその精神を味はうとして讀んで行くならば、そこには別に聲聞乘とか佛乘とかいふ樣な區別はなく、寧ろ全體を一貫せる一つの思想が脈々としてそこに流れてゐるといふ感じを抱くであらう。而もその各部分についていへば消極的な言葉で述べられた所が非常に多く、殊にそれは解脫の問題と關係ある理論の方面に於て著しいことが知られるであらう。阿含の敎には全部に一貫した理論といふものは存在せず、寧ろ理論は斷片的に部分〳〵に用ひられてゐるといふことも直ちに理解せられるであらう。然しこの理論なき全體にも脈々たる一つの思想が流れてゐるとすれば、之を捕へようとして全體を一個の理論に攝收しようとする努力はどうしても抑へることは出來ないであらう。殊に佛滅後の弟子達としては直接に師の姿を拜し奉ることが出來ないのであるから、思想によつて感化を受ける必要上、思想の整理體系化といふことは最も必要とせられるであらう。そこでこの主として消極的に述べられた阿含の解脫觀を解釋する上に、二つの方向が對立して來るのである。その一つはその表現の消極的な點から、そこに事實に於て消極的なる一種獨

特の涅槃の境涯が示されてゐると考へることであり、他の一つは、その表現は消極的であるが、實際それは佛の積極的人格的なる覺を單に言葉の上で消極的にあらはしてゐるのであると考へるのである。然るに阿含の内容を解釋する上にはどちらの見解も捨てることが出來ない。即ち第一に消極的な涅槃觀についていふならば、それは明かに經典の中に說かれてゐる所であり、殊に佛子弟子達が來世に得べきものとして示された所謂聲聞の四果といふものは、最後には肉體及精神の羈絆を完全に脫却したる消極的な境涯に到達するものと敎へられてゐたのであつた。而してこの涅槃を得べき現世の修行に關しても亦消極的方面に特に重きを置き、現實の欲望を脫却して外界に制せられざる解脫の境地を體得することに力を入れてゐたのである。而もこの聲聞乘といふものには一貫した理論がないでもなかつた。即ちそれは惑業苦の三つで、惑によつて業が起り業によつては苦果を感じ更にその苦より惑を起す。それは經典に於ては十二因緣の解釋の中にもあらはれてゐる。吾々の無明(惑)は行(業)に緣となり、行は識以下の現實的諸相(苦)を生ずるといふのである。(而してその諸相より更に愛取(惑)を生じ、愛取より有(業)を生じ、それが更に未來の生老死(苦)の原因となるといふ樣に解釋されてゐるのである。)

しかるに他方、阿含の消極的表現を積極的に解する方にも大いに根據がある。即ち佛の覺といふものは積極的人格的のものでなければならぬ。殊に阿含の敎は悉達太子より成道せる現實釋尊の生ける體驗をあらはす以上、この釋尊の覺がどこまでも消極的否定的であるといふ樣なことは到底考へ得べき所ではない。從つて、阿含の敎が佛の覺を衆生に示さんとするものであるとすれば、そこにどうしても積極的なる涅槃の内容を示す所がなくてはならぬ。而して佛の覺が積極的のものであるといふことは、佛の成道後に於ける實際の活動に照して見れば最も明かであらうと思ふ。釋尊は成道以後巷に出でゝ衆生現實の苦を救はんとせられた。そのために國家社會を善導し、平和な安樂な生活を實現せんとして積極的建設的な敎化に從事せられたのであつた。又釋尊の說かれた道德的の敎は盡くこの積極的な道德生活に

よつて自他共に幸福なる生涯を送らうとすることに歸着してゐた。中に消極的に欲望の解脫を得んとして努力する點もあるが、それは明かに道德生活に於ける眞の歡悅を味ひ最も力强く之に向つて奮鬪することを得るための前提であつた。この現實的方面に於ける積極的な思想が釋尊の菩提樹下の覺より出でたるものであるとすれば、菩提樹下の覺をあらはす十二因緣の敎の如きももつと積極的な堂々たる覺をあらはしてゐるものと考へねばならぬであらう。

しからばかゝる積極的な涅槃觀といふものは實際經典中に說かれて居らぬかどうかといふに、見樣によつては阿含の解脫觀の全部が佛の堂々たる積極的の覺をあらはすために說かれてゐるとさへいふことが出來ると思ふ。若し吾々が阿含の中に說かれた一部の消極的理論(例へば析空觀や不淨觀の如きもの)に捕はるゝことなく、經典の消極的表現の中に暗示せられた現身釋尊の覺そのものを直接に體得しようといふ氣持で經典を繙いて行くならば、阿含に說かれた涅槃の思想には大いに積極的な内容が盛られてゐると感ずるであらう。そうして又、この經典を單に聲聞乘の見地から一律的に說明し去らうとすることが如何に窮窟であり不自然であるかを、よく理解することが出來るであらう。このことは恩師の如き達眼の士によつて既に明瞭に指摘されてゐる點であつて、阿含の涅槃觀を全然消極的に考へてはならぬといふことは既に學界の有力なる議論となつてゐる。そこで吾々は先輩の發見に基き實際に阿含の積極的内容に觸れることが出來るのであるが、而も之を體系的に理論化せんとすることは、そこに或程度の努力を必要とするであらう。例へば、吾々は十二因緣などについてもう一度積極的見地から之を見直して見ることを要する。經典に說明された三世兩重の因果の說明もたしかに妙味あるものであるが、しかし十二支そのものゝ配列はこの說明にあらはれてゐる内容以上に何者かもつと奧深きものを示唆してゐることはないであらうか。殊に行といふ字を單純に業といふ意味に解して前記の如く消極的に說明することは、深遠なる釋尊の正覺を餘りに平凡化する嫌はないであらうか。尙又、是は識以前に業が存在することに歸着するのであるが、此點は釋尊が出

家されて間もなく一婆羅門師に質問せられ而も彼より完全なる解答を得ずして無師獨悟を求められた點より考へて、釋尊の覺が再びこの疑問にさらされてゐるといふことは甚だ不自然であると考へられぬであらうか。これらの點より考へて、吾々の前回述べた十二因緣の理論的說明は、必ずしもその細部までも固執する必要はないのであるが、大體に於ては佛の覺に近づく一つのよき見地であるといひ得るであらう。そうしてそれは五蘊說との關係に於ても理論上大體決せるものであつた。吾々はかくの如き研究法によつて、佛敎の根本經典としての阿含の思想が如何に生き〳〵としたものであり、又一切經の思想がその中から湧れ出して來る源泉としての豊富なるものであるかといふ點を、味つて見る必要があると思ふ。

是を要するに、阿含の佛乘は經典の內面に含蓄的に而も明かに示されたものであり、吾々は鋭い直感と體系的な思索とによつて、經典より直ちに之を味ふことが出來るのである。然らば阿含に於ける佛乘と聲聞乘とは如何にして同一體系に攝することが出來るかといふに、これは結局聲聞乘を方便として考へるより他に途はない。何となれば佛の眞の覺はどこまでも積極的人格的のものでなければならず、聲聞乘は寧ろ人格の眞意義を沒却する方向に走つてゐるのであるから、これはどうしても佛の眞の證とは考へられない。而して何故にかゝる方便が設けられたかといふに、その根本は在世の印度の人々の物欲的な性格を矯正して正しき生活に入らしめる爲のものであつたと考へられる。即ち彼等が道德的生活に入るには先づ欲望の解脫が必要であり、それにはこれに相應したやうな消積極解脫觀が必要であつたのである。又理論的にいつても現實の生死無常の境涯を脫却せんとするには、先づ現實の根本制約を否定し然る後に積極的な菩提の眞相を明かにすることが適當であつたのである。然らずんば佛敎の外道と異なる眞實の意義は明かになつて來ないであらう。而もこの消極的說明はそれ自身完成せざるものなるが故に、先づ一應之を完成せるものゝ如く示して弟子達を精進せしむることが必要となつた次第なのである。上來の見解は法華經によつて始めて明かにせられた所であつて、之によらずんば佛敎の全體は到底一貫せる體系の中に收めることは出來ないのである。

さて以上聲聞乘と佛乘とを區別したのは、これは唯だ解脫の問題を考へる上に必要であつたので、それ以外の方面では特に之を分けて考へる必要はないのである。從來阿含の全體を聲聞乘的に解釋せんとした結果、阿含は道德的方面に於ても消極的退嬰的隱遁的である樣に誤解されて來た。吾々はこれより阿含に對する各種の誤解について述べようと思ふのであるが、以下の所論に於ては右の聲聞乘と佛乘との區別を顧慮する必要はなく、寧ろ率直に阿含思想の大局を捕へんとして進むべきであらうと思ふ。

（次續）

> 正道を踏み、國を以て斃るゝの精心無くば、外國交際は全かる可らず、彼の强大に畏縮し、圓滑を主として、曲げて彼の意に順從する時は輕侮を招き、好親却て破れ、終に彼の制を受るに至らん
>
> ―西鄕南洲翁―

寄附團費誌料領收（自九月二十一日至十月二十日）

一金拾圓也　横濱　平岡宗次郎殿
一金六圓也　神奈川縣　西山喜太郎殿
一金壹圓貳拾錢也　山形縣　村田義本殿
一金壹圓貳拾錢也　愛知縣　長澤寺殿
一金貳圓貳拾錢也　千葉縣　廣部乾山殿
一金參圓也　同　梶木顯正殿
一金貳圓貳拾錢也　宮城縣　尾形多喜男殿
一金五圓也　廣島縣　中村美津殿
一金五圓也　足利　山口錄造殿
一金五圓也　東京　故澤本牧子殿
一金壹圓貳拾錢也　大阪　中村義人殿
一金貳圓也　東京　森山春吉殿
一金壹圓貳拾錢也　室蘭　廣瀨惠秀殿
一金五圓也　千葉縣　平山三藏殿
一金貳圓貳拾錢也　東京　小高清殿
一金貳圓貳拾錢也　茨城縣　下條惠敎殿
一金貳圓貳拾錢也　新潟縣　高橋大吉殿
一金壹圓五拾錢也　弘前　竹內軌榮殿
一金參圓五拾錢也　東京　菊地烽三殿

右難有入帳仕候也

財團法人統一團會計

落穂籠

上田辰卯

政友會内閣の放漫政策を排撃して昭和四年夏に濱口内閣が成立した。彼は金解禁の一本槍で緊縮節約を要求し、國民亦無我夢中で儉約をして財界恢復の曙光を待つた。處が緊縮節約は必ずしも財界の建直しを齎すものでなく折柄歐米の恐慌に卷添へを喰つて産業は極端に萎靡し國民はヘト〳〵になつてしまつた。そこで政友會はソレ見たことかと金解禁亡國論を振り廻して再び民政内閣に代つて金再禁止と通貨膨張を計つた。然るにこれ亦口先きばかりで腸がなく一時財界は興奮してフラ〳〵となつたが軈て爲替は下落して輸出は利かず物價は上つても購買力は反つて減退するといふミヂメな體裁になつた。氣の早い連中は默つて見て居られず政黨政治なるものは國民にウソを敎へる政治なんだといきり立つて終に五月十五日にあの事件を起して一切を精算してしまつた。

齋藤内閣といふものがかくして成立したのだ。

政友と云ひ民政と云ひ過去にやつた政治のあとを洗ひ立てゝ見ると實際拙いことばかりであつた。政友が排撃するのも民政が反駁するのも尤もだ。更らに第三者が乘出して一切を蹴飛ばしてしまつたのも決して無理ではない。然しながらそう〳〵人の攻撃ばかりしてゐないでもう一度考へ直して見る餘地はないだらうか。今から考へればたゞ失敗といふより外批評の下しやうのない濱口内閣の金解禁も考へやうによつて何かの藥りになつては居なかつただらうか。これに取つて代て終にピストルを喰つた犬養氏の政治も亦日本財界を救ふ何かの力になつてゐなかつたらうか。

大正十二年の大震災の打撃といふものは一寸數字的に指示出來ないために財界に及ぼす打撃は兎角忘られ勝ちであるが實際は大きな戰爭をやつた位の影響があつたのだ。幸か不幸かあのときは國民が今日のやうに爲替相場に就ての關心を持たなかつたからよかつたものゝ若しあれが今日であつたら差當り國價の減茶安で通貨制度の混亂を起し日本も一遍に參つてしまつたかも知れなかつたのだ。濱口氏は政友會の永い間の放漫政策を馬倒してゐたが實際はあの大破壞をやつた跡にはあの程度の緩かな政治と取つてくれなくては國民の立直りは不可能であつたのだ。通貨を膨張させ爲替を下げてやつとあれ丈の復興が出來たのだ。理論はともかく私は實際界から見て濱口井上兩氏が一口に放漫無謀の政策よりも政友會を攻撃したことはあまりに苛酷であつたと思ふ。

然らば濱口内閣の金解禁も緊縮政策も全く餘計なことをやつたのかといふもこれも決して餘計なことではなかつたと思ふ。否餘計なことよりもこれがなかつたら今時分日本の財界は獨逸か露西亞の二の舞をやつてはゐないだらうかとさへ思はれる。

田中内閣の財界は復興促進に心急がれたためもあつたらうが些か放漫過ぎた嫌ひはあつた。これがために復興も出來たと云ふものゝ然し何時迄もこの狀態を續けては行かれなかつたのだ。現に對外爲替はだらしなく下落し初めたし組織的にも精神的にも水ぶくれの形であつた。そこで濱口氏が嫌な役を買つて出てこの水ぶくれの水を突付き出して緊縮へと取り掛つたのだ。この時はまだアメリカも歐洲も今日程でなかつたからこの緊縮が割合に徹底出來たのだ。物價引下げも出來た。又賃銀引下げも家賃の引下げも一切の引下げが割合に樂に出來たのだ。この水ぶくれがどうやら平常になつたときにアメリカの恐慌が襲來して來たのだ。獨逸の破産、英國の再禁止がやつて來たのだ。歐米に於ける物價の大暴落が襲つて來たのだ。それを兎にも角にもガッチリ受止めたのは全くこの二ヶ年間の緊縮のお蔭であつたの

だ。濱口井上兩氏こそ日本財界の恩人と云ふべきだ。

處が昨年の秋口になつて世界の形勢は益々險惡になつて來た。最後の世界的恐慌の大暴風は到底日本の大藏大臣の一人や二人で受切れるものではない、そこで政友會が代つて金再禁止と來たのは當り前で例へば大風に雨戸を締めてやつと一時を支へたやうなものなのだ。

然しこゝに忘れてはならないのは金解禁を濱口氏がやつて置いてくれたればこそ再禁止といふ奥の手があつたことだ。政友會は緊縮亡國と罵倒したが實は民政黨の緊縮節約こそ自己の政策を實現せんためになくてならぬ前奏曲であつたのだ。恩人でこそあれ毫も仇敵ではない筈である。

更らに齋藤内閣に見てもそうである。成程犬養氏は掛聲ばかりで腸はなかつた。然し元來經濟界といふものは具體的政策で救濟せねばならぬやうになつてはもう末なのである。掛聲丈で呼吸を吹き返せばそれが最上の策なのである。今春のあの世界恐慌の荒浪を掛聲一ッで半年の間持たせた犬養氏の手腕は偉大なものと云はねばならないぢやないか。又掛聲丈で濟ませてくれたればこそ愈々となつたこの夏に通貨政策も復興救濟事業も失業公債の增發も低金利政策も何もかも一切の救濟政策が出來たのだし又その威力を發揮出來たのだ。考へやうによれば政友も民政も超然も官僚も軍閥も一切が今迄仇敵の末と思ふてゐたそれ等が悉く自己を生かしてくれたのだし又それ等が互に相因果し相働いてこの有史以來未曾有の世界恐慌から日本を救ふてくれたのである。

凡そ總ての物には皆兩面がある。その惡い一面のみを發き立てゝ鬪爭をするのが現代の常弊だ。政黨のみが他人のアラばかり探してゐると思ふてはいけない。現代人の悉くが皆これではないか。姑は嫁のアラ探し從業員は主人の無理解を難じ女は男の横暴を男は女のデシャバリを互に相競し果ては總ての人がこの苦の根源は不完全なる現在の制度そのものにありと結論し、誰一人としてそれ等が總て自己を生

かしてくれるものであると解釋するものがないのが所謂近代の社會思想なのだ。

美しい他の一面を見ることは出來ないのか。

かゝる一切の苦の對照が總て自己を磨き自己を生かし自己を完成してくれるものと解釋することが出來ないか。

滿洲國が獨立し日本がこれと提携して行くといふ誠にお芽出度いことに妙にケチを付けたがるものがある。滿洲國といふ色男を持つたからたゞさへ金廻りの苦しい日本はこれからが思ひやられるといふ。元來色男は昔から金と力がないと相場のきまつたものだ。金を貸してその上にこちらの兵隊で守つて迄やらねばならないといふに至つては日本も隨分道樂が強いと云ふのだ。資源にもと云ふけれども石炭にしろ鐵にしろそれは一朝戰爭となつて金にかまわず掘ればあるだらうが平時の經濟價値なんかは頗る疑はしい。營利價値と來たら全くゼロだといふ。私は滿洲とはどんな所か行つたこともないから或はそう批評する方が當つてゐるかも知れないがその當否を斷ずる前に少しく遡つて日清日露の兩役後に於ける領土獲得の時を考へて見やう。

日清戰爭のときは私はまだ赤ん坊だつたから知りやうがないが何でも話しにきくと臺灣といふ人を喰ふ土人のゐる島を戰利品として取つたといふので國民の多數は半ば嘲り相當の識者さへその後の經營はどうする積りかと眉をひそめたそうだ。然し別に二億テールといふ償金を取つたので講和談判に對する國民の攻擊はなかつたそうだが日露戰爭のときは決してそうではなかつた。私もはつきり記憶してゐるが、ポーツマスで愈々樺太の南半分丈で償金は一文もとれないと決つたときに帝都では燒打ちが初まつたのである。樺太とは何だ。日本人なんか到底生きられないやうな結氷の地ではないか。そんなものは

金を付けてくれると云つたてお斷りだ。それが何ぞや國を賭しての戰に對する賠償とは?、といふやうな演說が至る處で初まり全權大使小村壽太郎氏が歸朝されるときは特に暗殺を恐れてその日取りを發表しなかつたものだ。私はよく覺えてゐるがその當時は國民の殆んど全部が樺太より三億五億の償金を喜んだのだ。

さて今日になつて考へて見やう。日清役のとき鼻汁もヒッカケなかつた臺灣は今日はどうだらう。食人島と嘲つた臺灣こそは日本產業の寶庫ではないか。一億に近い日本人が毎日舐める砂糖を一匙も外國から仰がないで濟むのは臺灣を取つたお蔭ではないか。年に二度も取れる米はどうか。あの無限の木材はどうか。日產十萬石とさへ云はれた恐るべき石油層は臺灣の錦水といふ處にあるのだ。今迄に金もかけたかも知れないが今日この島を賣り物に出したら恐らく何百億といふ値打ちのものだらう。

更らに樺太に就てこれを見やう。成程寒いことは寒いそうだ。然し日本人の住めない處ではない。毎年英國に丈でも三千萬圓から輸出する罐詰めは樺太に泳いでゐる魚を捕つて拵へたものだ。我々が毎日讀んでゐる新聞紙から便箋封筒に至る迄紙といふ紙の原料のパルプは殆んど全部と云つてよい程樺太に仰いでゐる。日本が世界の三大國として威張れる海軍は樺太の石油田を何よりの力としてゐる。生糸と覇を爭ふ人絹の原料供給地もこゝだ。石炭も木材も殆んど無限と云つてよいだらう。今日恐らく樺太からあげる利益といふものは年に二億を下るものではあるまい。

味噌も糞も一緒にして、たゞ首さへ並べれば對當の權利を主張出來るといふ考へが如何に誤つてゐるかゞこの一事を見ても解る。普通選擧と云ひ多數政治と云ひ所謂近代の社會主義的平等思想が如何に薄弱な空理の上に立つたものであるかゞ證明される。國民の大多數が嘲つて顧みなかつた臺灣は數氏の人々の熱心な努力によつて今日をなしてゐる。これこそ日本產業の資源地と着目し一切の利權に代える獲得した樺太は最初は國民の殆んど全部が口を揃へて反對した土地なのだ。若しも多數のものゝ主張するが故に正しいと云ふならば臺灣も樺太も今日の富を日本に提供してくれなかつたらう。

世に聖者は少くして惡人は充滿する。賢人は稀で愚物は多い。若しも數をもつて總てを決しやうとするならば賢聖は忽ち衆愚の蔽ふ所となつて忽ちその委を沒することはグレミアムが經濟學に示した法則を待たづして容易に知り得る。

今日の社會を誤つたものはこの平等の思想である。質の吟味を忘れて量のみに重點を置いた思想の罪である。

街頭布教に參加して

本郷常次郎

（聖訓の色讀）

恩師本多上人があの老體を提げて、街頭に獅子吼せらるゝ尊き御委を、統一誌上に拜して、感激の涙に咽んだのは、つい此頃のやうに思つたがはや二星霜の昔となつてしまつた。それから間もなく恩師は、吾等弟子後輩を殘して、寂光の旅へ先立たれたのである、今、自分が再び帝都に戻り來つて恩師の亡き後を同志と共に夜々街頭に立ちて、一般民衆に呼びかけて居るのは、誠に不思議な廻り合せと思はるゝ。恩師の肉身今は滅し給ふとも、その文字身たる南無妙法蓮華經の玄題旗の靡る所、恩師は今尙ほ吾等を指導し『汝若人等二陣三陣つゞけよ』と先頭に立ちて號令せられて居るのである。

茲に卒直に街頭に起ちての二三の體驗を語らして貰ひたい。

△　△　△

『法妙なるが故に人貴し、人貴きが故に所貴し』とは古聖の言、『持つ處の御經の諸經に勝れてましませば、能く持つ人も亦諸人にまされり、爰を以て經に云く「能く是經を持つ者は一切衆生の中に於て亦これ第一なり」と說き給へり』とは宗祖の御語、吾等正法を弘通するの所、吾にして吾にあらず、吾以上の吾を見る凡身即佛身を成就しつゝあるのである。凡夫が如來の使として如來の事を行ずる…、其以上の光榮が又どあらうか。吾等の住居例へ九尺二間の茅屋たりとも、金殿玉樓にも之れ過ぎたるか。

『されば我等が居住して一乘を修行せん處は何れの處にて候へ常寂光の都たるべし』云々。今更の如く聖訓身に泌みて有難く感じられたのである。

宗祖は又彼の迫害多難の御不自由なる生活に於て『日蓮は世間には日本第一の貧者なれども佛法を以て論ずれば一閻浮提第一の富者なり』とか『日蓮程喜び身に餘りたる者、よもあらじ』と法悦を謳はれて居る。宗教はこれまで最も吾が身を不幸と感じたるものを、其の反對に自分程幸福なものはないと悟らしめる神秘なる力を持つて居るものである、普通の人はそれは負け惜みか、何かと思はるゝかも知れないが、聖人の此の御語は何等の僞り飾りも無い心情の有りの儘の發露であつたのである、凡人なら愚痴と云ふかくたばつてしまふと云ふ所だが、そこが信仰の偉力である、信仰なきものには這般の消息を會得することが出來ない。今自分は麗げながら彼の御心情を體驗し得て餘りにも勿體なく感じたのである。

次に一般聽衆の眞摯なる求道の態度を見て余は心から悅びを感ぜずには居られなかつた、あの長い時間。講師はつぎ〳〵と變るとも、聽衆は所謂「相手變れど主は變らず」で始めから終まで立ち續けざまである、そして人數は殖えても減らない、彌次は愚か皆讃嘆の聲を放つて居る。(同志の一人曰く、「天地が感應するのでせう」と、余曰く「然り吾等の叫びは佛天の加護に因り始めて爲し得らるゝ所である、吾一人のみの力にあらず、諸天も定めて照覽ましますならん」と。尊いかな、本佛の力！「千萬人と雖も吾れ行かん」の大勇猛心もそこから始めて湧き出づるのである。)のみならず或は學生、勞働者或は婦人と共鳴者の續出するに經み、恩師が世に誤れる人の多いのは是れ敎へざるの罪である、敎を口にすればは如何なる者も皆正しきに返る」と常に云はれて居た御語を思ひ合せて益々布敎傳道を盛にせざるべからざるを痛感した。殊に今や時局多難の時に於ておやである。經に曰く『今正に是れ時なり』と日蓮主義の宣布今日より急なるはなく、今日より切なる時はない。「立正」の勅額は何の爲に下されたのか、世界を指導すべき目標として與へられたものではないか、何ぞ惰眠を貪りつゝある時の長き。起てよ日蓮主義者！出でよ殿堂より街頭へ！。

因に同志諸君の擧つて南無妙法蓮華經の信念の下に、獻身的聖業に從事せらるゝ尊き姿を思ひ浮べて、余は一入感謝に堪へざるものである。恩師は今靈山會上に嘯かし會心の笑みを湛へて居らるゝことであらう、そして吾等をお守りになつて下さるに違ひない。南無。

九月廿六日街頭布敎より歸りて

逝ける母を慕ひて

まんじ

はしがき

我が母の逝かれて早や三年、十月の月と申せば中旬には祖師のお會式があり、下旬には母の命日を偲んでいかにも堪え難い淋しさを泌み泌みと感じます。吉し祖師の御在世に於て敎化を蒙つたかどうかは知らず、今は既に悲母に遇えない秋の哀れさは一入であります。天空に高く呼切つた明月を觀るにつけても、地の蟲むらにすだく虫の聲を聽くにも、今やわが母の姿を拜し得ない淋しさ……

愛別離苦

さて私の幼い時を省みると　私は小學校の卒業前から親達は公務の爲め、但馬の方に赴かれねばならなくなつたので、私は獨りの叔父と郷里播州に心細く殘つて居ました、其後親達の歸らるゝやうになつてヤレ嬉しやと思ふ間もなく、私は勉學のために又復兩親とお別れせねばならなくなつた、而して學校を卒てからは目的通り海上生活に大洋を流浪すること二十數年。先哲は『父母在ます時は遠く遊ばず』と敎へられて居るに、さても私共兄弟は不孝の者であつたと深く自責の念に皆懺の前で懺悔致す次第であります。

母乳のあたひ

五十年の過去を追懷致しますと、私ほど永く母の乳を頂いた者は世にも稀でありませう。今の人々は生後一年以内が離乳期とされて居るやうですが、私は二年や三年でなかつた、四年や五年でなかつた、六歳になつても七歳になつても母の懷によく縋たかくしたものです。日蓮聖人は母の恩愛殊に深きを歎じて、赤坊を産める母親は『我苦を忍びて急ぎ懷き上げて、血をねぶり不淨をすゝぎて、胸にかきつけ懷きかゝへて、三箇年の間慇懃に養ふ程に、母の乳をのむ事一百八十斛三升五合なり、此乳のあたひは一合なりとも三千大千世界にかへぬべし、されば乳一升のあたひを捻へて候へば、米に當つれば一萬一千八百五十斛五升、稻には二萬一千七百束に餘り…』と御せられた、若し一石の時價を論定價格の二十圓五十八錢と致しますと三箇年の合計は實に金四千三百九十七萬餘圓となります。何と驚くべき巨額でありませんか、これが三年の間に愛兒に育くまれた母親の大慈悲の物質的恩惠の一部分に過ぎないのでありますが、私におきましてはこの幾層倍にも相當する恩寵を忘にしたことを思ふ時に、唯々涙ひおのゝくばかりでとても物質的に親の御恩の千萬が一分も酬い得るものではありません。

母は兒を忘れず

更に精神的に親の子を思つて下さることは、愛に敢て私知きものが申述ぶる迄もありませぬが、大きくなつて子供の父となつた後に於ても猶ほ幼兒のやうに内外に亘つて細々とした御注意を下さったものです、それは母なればこそです、何と嬉しい有り難い事ではありませんか。而かもこの母から今はお言葉を聞く事は出來ません。

心の開き感じが致すのも敢て私一人ではありますまい……。月日の經るに從つて彌々淋しさが募つて參ります、嗚

親ごころ

明治四十四年夏の頃、私が新船受取りに參つた春洋丸が、處女航に神戸に寄港致します時、其頃日本一の優秀船た親達に觀せて悦んで頂かうと、長崎から御案内狀を出しておいていそ〳〵と入港しますと生憎海上は波が高いのです、そして本船は遠か沖合に投錨して居ますから、小蒸汽船が幾百の觀衆を運ぶのもなか〳〵困難でありました。夫れでも親達は船を觀るよりも寧ろ我子に逢ひたいの一念から、父と共に汽車さえ嫌いな母が、遠い距路から態々來られて其上小舟で搖られ〳〵て漸く本船に昇られた。お氣の毒に母は見物どころでなく私の部屋に入らるゝや蒼白のお顏で長椅子に凭はれつゝ紅茶一杯も手にされませんでした。父のみ元氣で船内を隈なく見廻られた……。折角苦しい思ひで來られたのも、碇泊時間の短かい爲めに直ぐにお別れせねばならない、來られる時は希望に充ち滿ち張り合はあつたでしようが、お歸路は最早や樂もなく厭々ながらどうしてもその荒波を小舟で再び乘り越えねばなりませぬ、義務ある身にはお伴する事も出來ない、後に殘けば波止場に上陸されて待合室に數時間横になつたまゝで、アンナ苦しい事はなかつたとの事、思へば罪深い不孝の自分でありました。

護法之母

大正十五年春　私は陸の人となつて其後、本多上人のお手傳をすることを母は大層喜んで下さつた。最初私は二三年位で御用は濟むだらう。そうすれば海上へと思はぬでもなかつた折柄友人が三度ばかり自分に大層よい條件で是非乘船をと懇望して來ました。私は經濟上から暫らく稼ぎに出やうと母に語りました處が、母の申すには『モー御船に乘ることは止めてお呉れ、雨につけ、風につけ、心配でナア……それに第一本多さんもお困りになるであらうから……』ハツと私は目覺めた、ア、我れ誤てり、財寶に魅せられんとせる一刹那　母の一言で危く救ひ上げられた心地して『本より存じの旨』ではなかつたかと一轉、朗かな氣持ちとなつて斷然その願みを謝絶しました。母の歎は一段と輝いて拜されました。

母は私が毎晩歸宅が九時十時となつても必ず風せずチヤンと待つて居て下さつた。どうかおかまひなく早くお休み下さいますやうにと申上げても、外で御法のお仕事をされてゐるのに、内で早く寢ては御佛樣に相濟みませぬからと、どうしても聞き入れられませんでした。時に十二時過に歸つた時は、靜かに母の居間を覗きますと『遲うなりましたナア、先に樣になつたヨナ』と矢張り眠らずに待つて居らるゝ、嗚呼子は五十になつても親の目からは幼兒の時の愛に變らぬ、大慈大悲の母性愛、この母の慈言も三年あとから聞えない、今は寫眞と一片の肉牙を拜するのみ……　嗚。

不言實行

我が母は昔の寺小屋時代でこれと申す教育はうけられなかつたのでしようが、併し子弟の養育や主婦としての一家の經濟方面、其他幾多の特長をば、若い子女に教えられてゆかれたことを考へます時に、夫れは母の信仰の然らしむる所と思へるのです、母の佛性は常に躍動して居た事を痛感致します。

母は若い時、郷里から志方や姫路へ數里の田舍道をてく〳〵と女足で往復して、本多說下や小林上人の教化に浴されたさうです。七十數歳となられても寒行會には惡いぬかるみを杖をたよりに、七八町は徒歩して若い人達の道念を鼓舞策勵して下さいました。

母は自分では教理を試きませんけれ共、常に本多說下の教、信仰と道德、特に義の觀念が强く現はれ、默々として身に示してくれました。老子は『言ふ者は知らず、知る者は言はず』と申して居りますが、私共は全くお恥しい次第であります。母の言命もこの義の道德に依つて若干早まられた事を殘り惜しく思ひますが、母としては臨終の一週間も前にチヤンと之を知つて其二日前私共に別れの挨拶をされ悅んで微笑しつゝ唱題裡に逝かれた……。その死相を見た無信仰の人が忽然として其場から直ちに信仰の道念開發した貴い事實もありました。

至心合掌

今茲母の年回に當つて、我身に不孝の數々あつたことを深くお詫びすると共に肆愛夫人の三大誓願、『正法智を得ること、正法智を得已つて無厭心で衆生の爲めに說くこと、身命財を捨て正法を護持すること』のそれは又我が母の私共に對する希望であつたことを虛つて自ら及ばざるを嚴ちつゝ母の御靈の前に拜跪し心の底から唱題致します。ア、我が慕へる母！本修院妙實日成大姉　座寶蓮華成等正覺報恩謝德の爲めに　南無妙法蓮華經

先立つ孫の七々日をむかへて

彌重滿佐子

今ころは　むねをはなれて　御佛の
袖につゝまれ　うれしかるらむ

ゆめの間に　七七日と　なりにけり
こひしかるらん　こひしかるらめ

うばたまの　其くろかみを　なでし孫
おもへば袖に　法の雨ふる

記事

本團月報

本團會館の工事は順調に進行しつゝ今や四分通り出來たことを幹部一同檢分さるべく、十月十日午後四時、小石川音羽の現場に來集、各部の注意や讃辭をうけて、夫より五時同丸山町上田邸に於ける懇談會に臨んだ。小西師と伊東氏は法務や急用で辭去されたことは甚だ遺憾であつたが萬已むを得ない事である。懇談會は所謂懇談で、各自の隔意なき意見や理想を披瀝論談し解決していつた。それが皆大切な法門の話であり、世の爲め國を思ふの至誠の發露であつて悉く清淨の一擧一動であることは特に嬉しく感ぜられた。いづれ着々として事實の上に現はれて來るであらうから今は摘記致しませぬ。午後七時和氣藹々の裡に散會した。

一質疑應答一

（問）法華經は即身成佛の御教なりと承つて居りますが、終るに一度法華經で葬られ成佛した筈のものに、何故年回法要等を營む必要があるのでしやうか、御教示願ひます。（岡山R生）

（答）即身成佛には二種ありて、一は現世現身に（此肉身の儘）證を開きゆきて成佛に向ふ者と、他は現世の身を終り最後臨終を期して此肉身が一轉して不滅の色心の身と成り、此不滅の人格身が佛陀の覺や力用を具足し行くものとの二種である。後者は之を即身にして而も順次成佛と云ふ。順次とは現世に直ぐ續く所の次の來世の生涯に於て成佛する故である。而て之を尙即身と稱する所以は、元來法華經の教義は、一人間にしても之を單なる人間と見ず、其の內面には十界の性用を冥具する者と見るが故に、此の本體的十界互具の身を即人身として考へ、從つて縱ひ現世人間の身相を滅して來世に佛の身相を顯したりとも、其は表面のみの差にてし本體不滅の眞生命には何等變異あるものに非ず、故に世を隔て身を變へて順次生に成佛すとも尙之を即身成佛と唱ふるのである。而て我が日蓮聖人は實に此の順次の即身成佛をとりて信念成佛の要諦と定められてゐるのである。さて此法華經で葬られ成佛した筈のものに云々の質疑に就て明答せん。所問の內容はおのづから二種を含む、一は生前信仰を有したる者の死後と他は無信仰なりし者の死後とである。先づ前者に就て語らん。日蓮聖人の敎へられし法華經の信仰とは、壽量品に甚きて釋尊即本佛なる無始常住絕對無上の尊嚴慈悲智慧功德救濟の唯一大人格者に至心深心强盛金剛の決定信を捧げて我が一生涯を貫き通し臨終最後息を引取る時も之を忘れず息絕ゆるや直ちに釋尊のみ許なる靈山淨土に迎へとられて莊嚴尊容の佛身を成ずる也。釋尊以上に尊きものとては何物もあらず、眞如も法性も妙法も皆釋尊の御覺の內容なり、妙法なるものが根本で釋尊は其の中より生れたり出で來たれりなど考ふるはとんでもなき誤謬である。此の正しくして同時に强盛なる信仰者は成佛疑なし、從つて我宗の眞の成佛には所謂中有なるものは無いのである。さてかく正しき强信心の者は成佛決定なる事不變不動の大心理なるが、然し實際に一々其の人間が終生一貫臨終の最後まで此の正信强信を確保したりやといふ事は我々凡眼には測り難く知り難し。唯其の當人の一念寸心に在るのみ。殊に最後臨終の一念は後の生を牽くに與つて力ある極めて大切なるものなり。信心者と見ゆる者が若し千人萬人型通りにポン〳〵と成佛して了つたものとすればかゝる生前の信心者に就ては死後法華經で葬る事すら不要となるであらう。佛知見ならでは之はわからず。故に我々は其死者の成佛する事に就ては唯々本佛釋尊の御胸に任せ奉り、我々としてはひたすら善根功德を積み行ひて此の功德なる目に

見えざる一種不可思議の靈力活力を死者に回向し以て其の冥福を祈るを大事となすのである。特に何人が見ても又當人自身にとりても、もとより終生一貫正念不動臨終正念疑無しと云ふべき人、例へば我等が恩師聖應院日生上人の如きに於ては、必ずや靈山往詣即身成佛せられ居る事確かにして我等は之を確信し寸分の疑をも挾まざるが、尚人間の至情として死者に對しては我々は深く〳〵本佛釋尊に縋り奉りて其の冥福を祈り追善供養し成佛得道を祈願するのである。抑も死者の菩提を葬ふ事は人間の宗教情操道德情操としても當然の事なり、『我が父我が母は成佛せられたる事疑無かるべきも尚我はみ佛に我が父母の菩提を祈り奉る願ひ奉る！』といふ此の情操が人心の至理也。此の至心至情あればこそ我も亦みづから信仰なるものを持ち得るのである。されば我自身の成佛の大事に就ても、法華經を信心すれば即身成佛順次成佛すといふ言葉だけに安んぜず、理は然るものなるも其の理を正しく其の理のまゝに體得體現するや否やといふ事は一に己自らの思念行爲即ち業に在り、即ち信仰生活の實踐躬行如何に在りといふ事をよく〳〵考へつつ慮りて一念決定一心不亂に正しき强盛の信念を立て通し、以てみ佛御親らより我に許されたる是人於佛道決定無有疑の所謂本佛の印可決定信を獲得持續する事こそ大切であります。

さて此に就て更に心得べき法門あり、今述べた如く我等の開悟證果は來世にあるも、現世の信行により既に其の種因を植ゑ且次第に增長せしむるものなれば、此の一念の信心決定の當處に於て現世凡夫身でありながらも既に成佛を決定すと云ひ、以て『成佛』の位に入つたものとする也。而て是は本佛釋尊より我等にくだされたる慈悲功德の救の力の籠れる救の網としての妙法の題目を唯名字を聞いたゞけにて直ちに本佛の大慈悲に深心に感激し難有く佛を信

仰し題目を口唱して以て成佛の位に入つた者なれば之を名字即の成佛と云ふ、即とは我等衆生と佛とが信心に依つて即ちそのまゝ相通ひ我が本具佛性の佛德力用が開發される前となつた事を云ふ也。否信心とは既に佛性開發佛德開發の一分也。されば成佛といふも廣義に解すれば、發心信仰の名字即位より最極究竟即の大覺正覺妙覺位までの間に段階があるわけ也。特に現世凡身の名字即位にて一生を終るまでの間を現世冥益の即身成佛といひ、來世順次生に菩薩より佛となつて、佛性本覺の妙體を修顯得體する事を來世顯益の即身成佛といふ也。而て釋尊の大悲證智と我等行者の信念とは固より全體不二一如にして此信念相續して以て我も亦遂に佛果の大慈悲證智を修德するものなれば全く慈信一體智信一如の妙行たる也。而て是は我が根本本來具有の佛性的人格が確實に成佛決定の因位に立つたものなる故之を本因妙位に入り本因妙位に安住し本因妙行を修すると云ひ、又今迄は單なる理論的可能に過ぎざりしものが今や實踐的確實に佛の救の確かさ成佛の確かさを獲得したものである故、之を我が心田に成佛の種を下したと稱して下種益と云ひ、又殆ど何等の智惠理解力無き無學文盲の人でも、唯一念本佛を隨喜渴仰する丈の領解あつて信心を決定しさへすれば成佛の大善因となる故之を唯信又は但信無解の佛德と云ひ、又は茲に眞佛子の資格を成就すと云ひ、又信念成佛とも受持成佛とも云ふ也。受持とは信の故に受け念の故に持つと釋して一生涯臨終に至る迄此正信强信を持ち通す貫き通す也。此の我が信心決定の時、我れは本因妙位に入りやがては本果妙の大覺法王位に登る事ゆゑに、此信決定の時本佛釋尊が我れに法王の職位を授與し允可せらるゝ故、之を戒師たる久遠の釋尊より妙法の智水を以て我は受職灌頂せられたりと云ふ也。日蓮聖人の得受職人功德法門鈔に『受職とは因位の極際に始めて

佛位を成ずる義なり』とあるは此義なり。只然れども重ねて注意を促す可きは娑婆の人間である間は、たとひ一方より見れば、名字即の成佛といふ位にある者とはいへ、他方より見れば、依然として凡夫の身心たるを免れぬ者故、どんな事情で惡緣に遭ふて信心を退轉したり忘失したり棄て去つたりするかも知れぬ樣な世界に居るものであり、又人間の果報といふものは左樣なものである故、我等信心者は決して油斷はならぬ也。飽迄返す〳〵も信心强盛大切なり。もし能く終生一貫臨終正念靈山淨土に往詣したる以上はもはや再び迷ふて生死する事は無く必ず成佛するものなるが、我等は此の理りを思うて信不退轉乃至念行位不退轉に終始する樣每に覺悟せずしては叶ふべからず。さればこそ我々統一團々員は每日朝夕の勤行にも『南無久遠實成大恩教主釋迦牟尼佛大慈大悲の本願力我等が信念を助けて常に本因妙の位に安住なさしめ給へ願はくば此功德を以て臨終を期して靈山に往詣し遠かに佛身を成就なさしめ給へ』と申して平生不斷より何時にても臨終正念に安詳として處し得るよう訓練し祈願して居るのである。『先づ臨終の事を習うて後に他事を習うべし』とは宗祖の嚴誡なり。眞の日蓮聖人の信仰は必ず臨終の刹那に即身成佛するのであつて、決して二世三世幾世の生涯を經て後といふ樣な薄弱なものでない。此故にこそ現世の我が信仰が益々〳〵熱誠强烈となり乃至一人をも化せんといふ菩薩行然り所謂『上求菩提下化衆生』の信心修行が眞劍に成つて來るのである。誠に來世直ちに成佛すると思へば一日も安閑として居れるものでない。又佛に成れるか成れぬかを疑ふ樣な躊躇する樣なぐうたら信心では所詮駄目なり。『危な〳〵佛に成ると思ひなば佛の眼にも危なかるらん』とは我宗の安心學者を以て自他共に許せる强信碩學の教傑合掌阿闍利日受師の誡なるが銘記して忘るゝ事勿れ、日受師又曰く、『必ず他

の信不に拘る勿れ』と、正令堂々一語凛たり、問者邪會ある勿れ。願はくは我も人も强盛の大信心深重の大信心値遇しまつる事難き我が大信心を立て通して目出度く靈山往詣の大佛事を成辨せよ『我法華經の信心を破らずして靈山に詣りて還りて導けかし』との日蓮大士開目鈔最後血涙の一語を棄つるな！妙法華經如來大覺世尊の教詔に曰く、『汝等智有ら ん者此に於て疑を生ずること勿れ當に斷じて永く盡さしむべし 佛語は實にして虛しからず』祖判に曰く、『我等末代に生れて法華經を信ずるは佛性を有するの實證なり』と言ひ、『人皆口に信心深き由を申せども誠に神に染むる者は千萬人に一人も有り難しと見えたり、されば佛に成る者も有りがたし』と誡め、『假令信ずるとも心に染めざれば一無間二無間十百無間は疑無き者なり』と告げ、又『人の心は水の器に從ふが如く、物の性は月の波に動くに似たり、故に汝當座は信ずると言ふと雖も後日は必ず讎さん、魔來り鬼來るとも驚亂すること なかれ』と慈訓嚴訓し給うたのである。此等は皆信念の安住を期せんとするには、內外種々なる惡緣魔緣奪功德緣に因つて動搖震撼せらるゝ顚倒妄想邪心魔心毒心を誡め、湛然常住の本來の眞心より發する淸淨なる信念の大威力を發揮せしめんとするものたる也。知れ我が日蓮大聖人が迫害多難忍苦重疊の中に在つて凛然としてその大信念を卓持し毅然としてその大節操を確守し、流離困頓の間に處して巍然としてその萬古不磨の大主張を一貫せられしは、皆此の金剛不動の眞心に基いて之を鍛練せられたる結果に外ならざる也。眞乎我等の好模範たり、あゝ先聖後聖其揆一也とは古人吾を欺かずと謂つべきなる哉。大涅槃經に如來の梵音雷震せり曰く、『正法を護得する因緣を以ての故に、此の金剛の佛身を成就することを得たり』と、日蓮大士の曰く、『心に二つまし〳〵て信心弱く候はゝ峯の石の

谷へころび空の雨の大地へ落つると思食せ大阿鼻地獄疑あるべからず其時日蓮を恨みさせ給ふな返す〳〵も各の信心に依るべく候久遠下種の輩は地獄に墮て五百塵點劫を經たる事大惡知識にあふて法華經をおろそかに信ぜし故也。返す〳〵も能く〳〵信心候てさはりなく靈山へまゐり〳〵て日蓮を尋ねさせ給へ其の時委しく申すべく候南無妙法蓮華經』

六に生前信仰弱かりし者半信半疑の者正信雜信混交の者又は全く無信心なりし者の來世は、もとより果報に各異りはあらうが成佛は覺束ない、或は惡道にでも墮ちて居ることであらうか。其故益々我等は其死者の爲めに功德を回向して冥福を祈らねばならぬ。死せし時直ちに妙法經力即身成佛の法華經で葬つたからとて直ちに成佛せりや否やは佛眼ならでは測り難く又其亡魂の得道得果せりや如何といふ事は其人自身の業報もある事であり、又佛の慈悲にも依る事であるから我々はひたすら善を積んで死者に回向するのである。決して妙法經力が足らぬからではない、又佛力が及ばぬからでもない、本佛の大慈悲は溢るゝ計りであり經力法力は佛陀大慈の意力と合して法界に瀰滿してゐるが、弱信雜信不信謗法罪障深重の者は此の本佛大慈悲救濟の網からさへも洩れて行くのである。罪障如何に深重なりとも一念懺悔强盛の正信を起して臨終正念したならば果報も芽出度からうが、終生なまくら信心や不信の者は死後の事が思ひやらるゝ故よく法華經で葬らねばならぬ。一度丈でよいといふものでない。之に就て年回や法要といふ事も功德回向の一種であるが、抑も回向なる事の本義を了解せねばならぬ。回向とは衆善功德を回轉して眞正菩提に趣向するの義也。自ら所修の功德を衆生に回向し亦以て佛道に回向して自他の成佛に資するは所謂『願はくば此功德を以て普く一切に及ぼし我等と衆生と皆共に佛道を成せん（法華經化城喩品）』にして是菩薩の心地佛法の本分也。

而て回向とは死者に對してのみに非ず、生ける人にもし、又他人の爲めにもし、又我が爲めにもするものなり。天台止觀七に云く、『一切の賢聖は功德廣大なり我今隨喜の福亦廣大なり、衆生の善なき我れ善を以て施さん衆生に施しをはりて正しく佛道に向はん聲を回して角に入るれば誓の聞ゆること則ち遠きが如し』と。然も此意は尙自力的にして自他合力の趣見られず、我宗の回向は、自己所修の善根功德を單に自力にのみ依りて回轉するに非ず、自の福德力を本佛釋尊の大慈神通功德の不可思議の佛力に冥合せしめ此の自他合體せる佛力佛功德を死者に回向せむと祈願するに在り、而て其亡魂の成佛に就ては一に本佛に任せ奉り信じ賴み奉るに在り。而て我が回向する功德とは何ぞや、年回法要等には經文讀誦を普通とし、此爲めに衆僧を供養し此事の功德をも自己の功德と合して回向するのである、又堂宇建立財物寄進等を爲すも宜し、所謂財と行とを佛の御慈悲功德の中に籠めて、佛の御手を通して之を亡者に進めて善根を資養し以て其冥福を祈るのである。然れ共其回向する功德の中心とは抑も己れ自らが無上正法たる本佛釋尊を信じ奉り同時に此の顯本法華の無上法を一人にても勸めて佛子を作るに在り、即ち正法の護持宣傳は最上の菩薩行にして又最上の追善菩提なり、是れ佛事を行ずる者佛意に叶ふ者佛恩を報ずる者佛の思召佛の功德善根の一切なれば也。此善德を佛力と合して回向する時は、宛も少物と雖も國王に獻ずれば意義甚大益々光輝價値を增す如く、我が功德も佛力に攝せられて廣大無邊となり至誠貫徹するのである。年回など云ひて日を定むるは、彼岸會を定むるの理と同じきものにて、元來特に日を定むるの要はなく常に每に追善して宜しきも、いつにてもよしと謂ひては人心の習又怠り勝になるもの故特に初七日三七日七々日乃至一週忌三週忌等々と定むるものにて斯かる三とか七とかの

數は大した意味あるものに非す、但し經典に典據はある也。（後に出す）而て回向の中心が自己の平生不斷の信念菩薩行といふ積功累德生活にある事前述の如くなれば、日月を重ぬる毎に德を增大し行く譯にて其度毎に回向法要を行ふは甚だ吉き事にして、又人心の習よりしても去る者日々に疎くなる道理なれば、其人を追憶する爲めにも生前の恩に報ゆる爲めにも又實に死後の成佛を祈願する爲めにも幾度となく法要回向するは吉き事なり、但し法要は時には己れ一人行ふも宜しからん、何にせよ、其人生前の信仰者不信仰者如何を問はず、我に至誠至情の宗教心あらば幾度となく死者の爲めにも祈らむといふ氣持の起るべき譯にて、かゝる人心自然の發動より見ても、一度法華經にて祈らば後は要なしといふ如き心地はあらざるべきものと信ずる。況んや其人の得道得果の如何は唯佛眼のみの知見し給ふ所なるに於てをや。最後に經釋並びに祖判を掲げて參考に資せむ。

優婆塞戒經卷五に云く、『若し又喪しをはりて餓鬼中に墮つるに、子爲めに追福すれば、當に知るべし即ち得。乃至是の故に智者は當に餓鬼の爲めに勤めて福德を作し、若しは衣食、房舍、臥具、資生に須ゆる所のものを沙門婆羅門等の貧窮乞士に施し、其れが爲めに呪願して其れをして福を得せしむべし。是の施の願の因緣力を以ての故に餓鬼に墮せる者は大勢力を得て施すに隨ひて隨ひ得。何を以ての故に生處爾るが故なり。是の施を得をはれば一切を變じて上妙の色味と成る』。心地觀經卷三に云く『其男女の追勝福を以て大光明あり、地獄を照す、光中に微妙の法を演說して父母を開悟し發意せしむ。昔の所生に當に罪を造りしを憶ひ一念悔心するに悉く除滅す。口に南無三世佛と稱して無暇苦難の身を脫することを得。人天に往生して長く樂を受け見佛聞法して成佛すべし。灌頂經卷十一に云く、『亡者の世に在りし時若し罪業あらば應に八難に墮すべし、幡燈の功德にて必ず解脫することを得べし。乃至亡者の爲めに其の名號を稱し諸の功德を修すれば福德

の力を以て是に緣りて解脫すること亦復是の如し徑かに十方に生じ願ふこと得ざるなし』又云く、『命終の人中陰の中に在りて身小兒の如し、罪福未だ定らず、爲めに修福して亡者の神（たましひ）をして十方無量の刹土に生せしめんと願すれば此功德を承けて必ず往生を得』　梵網經に云く、『父母兄弟和上阿闍梨亡滅の日及び三七日乃至七々日も亦大乘の經律を讀誦し講說して齋會し福を求むべし』。孟蘭盆經疏卷上に云く、『聖賢の敎を搜索して虔うて追薦の方を求む』法華經譬喩品に云く、『我が所有の福業今世若しは過世及び見佛の功德盡く佛道に回向す』

日蓮聖人四條金吾釋迦佛供養事に云く、『何よりも日蓮が心に尊き事候父母孝養の事度々の御文候上に今日の御文に涙更に止まらず、我が父母地獄にや御坐すらんと歎かせ給ふ事の哀れさよ、佛弟子の御中に目連尊者と申しけるは父をば吉占師子と申し母をば青提女と申しけるが餓鬼道に墮ちさせ給ひけるを、凡夫にて御坐しける時は知らせ給はざりければ御歎も無かりける程に、佛の御弟子と成らせ給ひて後に阿羅漢と成り天眼を以て御覽ありければ餓鬼道におはしけり、是を御覽あつて飲食を進らせしかば炎と成つて彌苦みを增させ進らせ給ひしかば急ぎ走せ還りて佛に此由を申させ給ひしぞかし、其時の御心を思ひ遣らせ給へ。今貴邊は凡夫也肉眼なれば御覽なけれども若しやさも有らばと歎かせ給ふ是は孝養の一分也、梵天帝釋日月四天も定めて哀と思食さんか華嚴經に云く、恩を知らざる者多く橫死に遭ふ等云云觀佛相海經に云く、是阿鼻の因なり等云云今既に孝養の志厚し定めて天も納受あらんか』。十王讚歎抄に云く、『かゝる厚恩を蒙れる身の徒らに月日を送り居て、三途の重苦に沈みたる親の菩提を弔はざらんは淺間敷事也爭か諸天惡み給はざらんや其の上多くは子を思ふ故に地獄の重苦を受くる事あり構へて弔ひても弔ふべきは二親の後生菩提也』又云く、『孝養に三種あり、衣食を施すを下品とし、父母の意に違はざるを中品とし、功德を回向するを上品とす、存生の父母にだに尙功德を回向するを上品とす況んや亡き親にをいてをや』

南無妙法蓮華經　　（河合陟明）

教報

本圓布教誌

九月二十六日　珍らしくも九月は霖雨連りに、六日も十六日も街頭遊出は出來なかつた、幸に此日例の通り三味線堀の辻々に立つことを得たので、河合勝明氏先頭に「彼岸に就て」と題して彼岸の意義から進んで法華經に入り、佛教統一の經玉であることや三觀超過を說き、日蓮聖人の主張なる約四十分間談述し、次いで梶木顯正師は「人生の根本義」なる日蓮聖人の御人格から力說し、聖人の主義綱格なる熱辯を以て大衆に慈教された、合掌して居る信男も見受けられた。續いて礒部滿事氏は「宗教と教育」との題下に世人の偏傾を警告し、警喩を擧げ又日常生活上の主要點を略說し。次に本郷常次郎氏は「時局と日蓮主義」と題して國難來た絕呼して大衆の覺悟を喚起され。最早十時を過ぐる甘分となつたので、山口智光師は「閉會の辭」をば約十五分間述べて散會を宣したけれ共、感激に溢れた大衆は容易に袂を別たうとも せず、三分も五分も其の儘佇立されて居たのを見て、何とは知らず涙の流れ出た次第である。來賓者としてはいつもの通り池田氏や齋藤氏其他兩三名の若い方々で、齋藤氏からは種々の便宜を與へられたことを深謝する。

十月六日　念に北の冷風襲來、晚景に知法思國會の幹部會を濟ませて大遠度に三味線堀のいつもの場所へ馳せ付けた。田中道爾氏は世界の大勢を達觀評論し遂に正を立てゝ國家興隆せざる可らざるを力說し。次いで礒部滿事氏は都會中心の餘弊より農山漁村の苦難を告げ眼米模倣を誡め自覺反省と異體同心の努力の肝要を擧げ日蓮大聖人の高風に隨順せんことを切望し。本郷常次郎氏に代る。氏は非常時に際する非常の覺悟は爭竟するに日蓮主義ならざる可らざることを經文並に聖訓を摘出して懇說し。次に山口智光師は快辯を振つて精神修養の妙所を縱橫に論及し時の過ぐるも藝術の增加に益々力說し漸く十時三十分閉會を宣し、齋藤氏等來援各位の交通整理其他の御配慮を感謝し散會した。

同十六日　は雨天休講

◎京都寂光寺

△宗祖大聖人六百五拾遠忌大法要記事

京都十六本山の一、洪道中興の祖、本因坊算砂日海上人にて名高き寂光寺の御遠忌は、前貫主上田智竜上人の御遷化のため、御正當の昨年は修行し得ずして暮れしが、新貫主金光孝碩師前貫主の志を繼承して晋山以來寄附勸募　堂宇の修理　御寶前の莊嚴等に力を盡して御遠忌大法要を企圖せらる。

上田金光の二貫主によりて洵に當山の面目一新せること、詰寺參詣の者周知感嘆せるところなり。斯くして十月八、九、の兩日　管長笹川日堂猊下御親修の下に監督布教師松本日公師　本山部長川崎英照師其他關西近末寺院各師の列席を得て天童音樂大法要は嚴修された。

△十月八日御遠夜法要並に記念大講演會

午後五時寂光寺に至れば此の日小雨なれども門の內外には數百の紅灯燈　紅白の幔幕數本の吹抜が御遠忌氣分濃厚に莊嚴せられ本堂直前には檜の大角塔婆が靡然靜かに打ち立てられ紋付袴の總代人婦人會員等の忙しさふな往來を見る。本堂の入口はいつのまにやら近代的な面かも高尙な白木の格子戶と變り、明く心地良し、堂內は赤毛氈をひきつめ古風な金屏風は當山の寺格を物語り御寶前の莊嚴も赤至れり盡せりと云ふべし、午後七時より金光貫主大導師の下に御遠夜法要は營まれた。次で八時より本堂北の間に於いて大講演會を開催、

一、開會之辭　近津聖學師
一、立正大師の高風　監督布教師　松本日公台下
一、日本文化の精髓と功用　管長　笹川日堂猊下
一、延寶講談日蓮聖人傳　永也田呑州先生
一、閉會之辭　吉塚通暎師

紫赤の法衣は古色蒼然なる本堂に一段と調和の妙を得て崇く、松本台下、笹川管長猊下時と共に彌々熱を加へ能所一體の境に遊び諄々懇說徐ろに細に渡り轉法輪の妙調は大衆をして信心の妙酒に醉はせ　其の光景一幅の妙畫と云はんか、參詣者貳百、午後十時半閉會、小雨降り續く、一同明日の天候を氣遣いて歸途につく、

△十月九日御正當大法要

佛天三寶此の浮與に感應し玉ひしか、一同の誠心誠意佛天三寶を感動せしめたるか、昨日來蕭々として降りしきりし降雨は今日はさらりと晴れて天高く絕好の秋晴、內外の莊嚴は昨日に變りはなけれ共、昨夜の法雨に淸められたる境內の木々は一段と色を深くし、紅灯燈　紅白の幔幕吹拔等が今日の盛儀を祝いての淨風になびき往き交ふ人の多忙の中にも「御天氣樣で結構でございます」の言葉も嬉れしい。

午後二時大梵鐘は一天四海皆歸妙法の妙音を起せば本正寺より樂人を先頭に二十有名の天童稚兒、法人及信徒此れに次ぎ蜒々長蛇の知き行列は靡樂に和して秋晴に映えたる二條通東山通りを進みて寂光寺に入る。蓮原時代か桃山時代かは知られ共都大路にはふさはしい風情なり、

法要は左の差定の知く嚴かに虔修せられ次で記念寫影宴會等ありて午後六時終了

差　定　十月九日午後一時半

入堂樂　三寶禮　勸請　方便品　壽量品（天童獻花）　天童問答　散華鉢　行導（自調天童加入）　中樂（天童退座）　法則　中樂　對揚　自我偈（燒香）　唱題　回向　別座法要　方便品　自我偈　署鉢　署對　自訓（我此土安穩）　唱題　回向　受持文　三歸　退樂　以上

金光貫主三十年間の教化地だけに對外的にも村雲日淨猊下の御遺德其他村雲婦人會多數、十六本山頂妙寺、要法寺、兩貫主妙隆寺執事、及他山信徒代表としては本國寺の天野治兵衛氏、本隆寺の時岡科七氏、國柱會の杉山喜八氏等の來山有りて式を飾り一般檀信徒の參詣も二百數十名の多數にて大盛會なりき、這本としては、

一、先哲墳墓參拜の栞（本因坊代々の墓寫眞入り）

一、立正の高風　笹川日堂猊下著、
一、日蓮大聖人記念大導導、

當日遠代人亀井牢七、兒玉與一、津田基三郎長谷川平吉、北澤安兵衛の諸氏及婦人會員の御方々の心よりの奉仕には感激の外はない、御信者は新くありたいと念願して筆を擱く、（近津生）

二本松教信

八月七日　午後一時五十七分二本松驛通過に

八月七日　午後一時五十七分二本松驛通過に

同　**七日**　午後二時二十一分二本松驛通過にて歩兵第四聯隊戰死者一基原隊に向ふ因つて出迎ひ讀經す。

同　**九日**　午前〇時八分二本松驛通過にて第二師團へ駐劄要員工兵、野砲兵八名渡滿す因つて歡迎す。

同　**十日**　午後四時三十分二本松驛通過にて朝鮮兵歩兵一等兵佐藤政雄氏の遺骨郷里に向ふ因つて出迎ひ讀經す。

同十三日　夜於蓮華寺題目講修行。

同二十一日　午後二時二十一分二本松驛通過にて福島、宮城兩縣救護看護婦八名凱旋す因つて歡迎す。

同二十五日　貧困救濟資金の爲め托鉢修行す。

同二十五日　午後六時〇八分二本松驛通過にて傷兵仙臺に向ふ因つて出迎ふ。

同九月五日　午後二時二十一分二本松驛着にて岳下村出身朝鮮兵菅野直三氏凱旋す因つて出迎ふ。

同　**八日**　午後一時五十七分二本松驛通過にて第八師團山形聯隊戰死者の遺骨十三基原隊に向ふ因つて見送讀經す。

同　**日**　午後六時〇八分二本松驛通過にて仙臺衛戍病院に傷兵二名行く因つて見送しぬ。

同十二日　於蓮華寺題目講修行。

同十三日　免因保護事業の爲め托鉢修行。

同二十日 午後二時二十一分二本松驛通過にて宮城縣出身兵遺骨一基故郷に向ふ因つて出迎ひ讀經す。

同二十七日 貧困救濟事業の爲め托鉢修行。

同二十八日 午後管長殿下に隨行して會津若松歩兵第二十九聯隊並に若松衛戍病院を慰問す。

臺灣教報

臺中市に於ける松鶴妙明師は大に法鼓を擊ちて元氣旺盛、左に各新聞記事を掲げて參照に資す。

松鶴妙明師の國體宣揚講演

在郷軍人臺中分會有志の組織せる奉仕朝參會では明四日午前七時より約一時間臺中神社に於て松鶴妙明師を聘し國體宣揚に就ての講演をする。（九月三日臺灣新聞夕刊）

臺中在郷軍人の奉仕朝詣會

今早朝臺中神社で松鶴師の講演を聽く

服部分會長以下會員有志より組織されてゐる奉仕朝詣會では、既報の如く今四日午前七時臺中神社參拜後松鶴妙明師から一時間餘に亘る講演を聽き八時散會した。（九月四日夕刊臺灣新聞）

臺中在郷軍人國體宣揚講演

松鶴妙明師が

帝國在郷軍人會では昨四日服部分會長以下二十餘名參集午前七時から臺中神社境内に於て顯本法華宗松鶴妙明師國體宣揚の講演を聽いたが松鶴師はいと熱心に說き多大の感激を與へた

「世のために聖なる文字を習ふとも

積はしりする人と言はれな」

歌を引いて明治大帝が維新の當初智識を廣く海外に求めよと御せられたのはたゞ國際競爭の落伍者とならず世界の進運に後れざる御聖慮なので西洋模倣の結果西洋かぶれをしてはならぬ。（十月五日臺灣新聞）

○臺灣臺中布教所　龍口法難會

九月十二日午後七時より法難會を挙行し續て講演に移り

法難會と題して一時間餘　松鶴妙明

○秋季彼岸會

九月二十日より二十六日迄彼岸法要中

二十三日午後七時より

○秋季皇靈祭と日蓮主義　松鶴妙明

二十六日午後七時より檀信徒先の爲め施餓鬼を終了し引續き左の講演に移つた

『極樂は十萬億土はるかなり

とても行かれぬ草鞋一足』松鶴妙明

滿洲皇軍の武運長久の爲

豫て御守一萬箇の謹製中にありし處漸く出來上りこれに對し九月二十八日より七日間毎日午前正八時より十二時と四時間に亘る祈禱を首尾修了し近日陸軍省の指令者次發送の準備も完了

法華宗信者が皇軍の武運祈禱

守護札一萬箇を送る

（臺中電話）臺中顯本法華宗では二十八日から十月四日迄七日間毎日午前八時から十二時迄四時間滿洲派遣軍皇軍の武運長久守護祈禱をなし武運長久守護の御札一萬箇は在滿軍人へ右祈禱終了後送付する筈。（九月二十八日臺灣日日新報）

お守護札を滿洲の將兵へ

臺中市新富町顯本法華宗布教所の松鶴妙明師は豫て滿洲の野に奮戰する我將兵の爲め昨冬單獨で一身をこめて參行し浮財をあつめそれを以てお守札一萬を謹製中であつたが此程愈よ全部出來上つたので在滿軍人會の手を經て關東軍司令官へ發送することゝなつた。（山と盛られたお守札と師の寫眞は省く）（十二月二日臺灣新聞）

以上の外にも二三の新聞あるも之を略す

本多日生上人名著在庫品特價提供

一聖語錄 改版　特價 送料共 金壹圓八拾錢

一日蓮主義本領　仝 金貳圓拾錢

一法華經要義　仝 金貳圓五拾錢

一日蓮主義心髓　仝 金壹圓五拾錢

一日蓮主義精要　仝 金貳圓九拾錢

磯部滿事謹輯

一本多日生上人　特價 送料共 金壹圓七拾錢

申込所　東京市品川區南品川四一二　財團法人統一團　振替東京九四二〇番

一月刊「教」誌　定價一冊 金拾錢　送料 金五厘　一ヶ年前金 送料共 金壹圓貳拾錢

申込所　東京市品川區南品川妙國寺境内　「教」發行所　振替東京一〇九四〇番

統一定價

一冊	金貳拾錢　送料五厘
半ヶ年	金壹圓貳拾錢　送料共
一ヶ年	金貳圓貳拾錢　送料共

統一廣告料

表紙一頁	金貳拾圓
一頁	金拾五圓
半頁	金九圓
四分一頁	金五圓

前金之事

昭和七年十月廿四日印刷納本
昭和七年十一月一日發行（第四百五十二號）

神奈川縣横濱市磯子區磯子町廣地一四八

編輯兼發行人　磯部滿事

印刷人　鈴木日雄

印刷所　東京市品川區南品川二丁目百八十一番地　都印刷所　電話高輪六〇二四番

發行所　東京市品川區南品川二丁目四百十二番地　財團法人統一團　振替東京九四二〇番

不許複製

編輯事務ハ發行所ニテ取扱フ

目次

聖語
聖訓摘要……日生上人
大英帝國の盛衰と吾人への教訓……佐藤皐藏
記事
○教報
○寄附團費誌料領收

第三十七年十二月號